



中・四国

アメリカ文学研究

Chu-Shikoku Studies in American Literature

June, 2024

No. 60



中・四国 アメリカ文学研究

Chu-Shikoku

Studies in American Literature

No. 60

June 2024

中・四国アメリカ文学会

The Chu-Shikoku American Literature Society

目 次

第51回大会シンポジウム報告

時間と空間の旅人——Henry James における「家」とモビリティ	堤 千佳子、町 田 みどり	1
	中 井 誠 一、中 村 善 雄	

研究ノート

読み返すスティーヴン・クレイン——ジャンル横断的な研究の試み	増 崎 恒	21
--------------------------------	-------	----

書評

相田洋明 編著

『ウィリアム・フォークナーの日本訪問——冷戦と文学のポリティクス』	重 迫 和 美	26
-----------------------------------	---------	----

真田満ほか 編著

『19世紀アメリカ作家たちとエコノミー——国家・家庭・親密な圏域』	辻 祥 子	30
-----------------------------------	-------	----

伊藤詔子ほか 編著

『アメリカ研究の現在地——危機と再生』	真 野 剛	34
---------------------	-------	----

西谷拓哉ほか 編著

『ロマンスの倫理と語り——いまホーソーンを読む理由』	藤 沢 徹 也	38
----------------------------	---------	----

諏訪部浩一 責任編集

『アメリカ文学入門 [新版]』	大 野 瀬 津 子	41
-----------------	-----------	----

CONTENTS

Report of Symposium at the 51st Conference

Travelers Through Time and Space: 'Home' and Mobility in the Works of Henry James

..... TSUTSUMI Chikako, MACHIDA Midori 1
NAKAI Seiichi, NAKAMURA Yoshio

Research Note

Stephen Crane Uncovered from a Crosscutting Perspective

..... MASUZAKI Ko 21

Book Reviews

..... SHIGESAKO Kazumi 26
TSUJI Shoko
MANO Go
FUJISAWA Tetsuya
OHNO Setsuko

中・四国アメリカ文学会 第51回大会シンポジウム

時間と空間の旅人——Henry James における「家」とモビリティ

まえがき

堤 千佳子

アメリカ文学史上、「家」という概念は特殊なトポロジー的要素を持つものの一つだといえるだろう。アメリカ大陸はもともとネイティブアメリカンたちの居住地域であったにも関わらず、イギリスをはじめとする様々な国からの移民者たちがやってきて、マニフェスト・デスティニーの掛け声のもと、東海岸から内陸へ、ついには西海岸へと西漸運動を進めていき、自らの「祖国」（ホームランド）を築いていったという歴史的背景がある。“house”がタイトルにつく作品を思い浮かべてみても、「アッシャー家の崩壊」（“The Fall of House of Usher,” 1839）、『七破風の屋敷』（*The House of Seven Gables*, 1851）、『歓楽の家』（*The House of Mirth*, 1905）など列挙にいとまがない。ヘンリー・ジェームズ（Henry James）についても「もう一つの家」（“The Other House,” 1896）という短編があり、“The House of Fiction”において小説についての批評を行っている。この中でジェームズは小説を窓のたくさんある家に例え、視点について述べている。

トポロジー的要素ということで、心理学者クルト・ザデック・レヴィン（Kurt Zadek Lewin）の「場の理論」について言及すると、彼の理論では、人と環境とが相互関連しているひとつの場の構造を「生活空間」と定義し、人間の行動はその個人の人格と環境との間の相互作用によって決定されるとしている。

本シンポジウムでは「家」とモビリティについて取り上げる。ここでいう「家」とは構造物としての「家」であり、帰属する場所、人間関係が展開する場所としての「家」である。時間と空間の交差する場所であり、人間の行動を引き起こす場でもある。ジェームズ作品では様々な「家」が舞台とされ、「モノ」が過剰に収容される場であり、「現実界」と幽霊の存在する「異界」、あるいはパラレル・ワールドが共存し、登場人物に混乱を引き起こす場でもある。モビリティとは英語の「mobility」のことで、「動きやすさ」、「可動性」、「移動性」、「流動性」などを意味し、職業の移動や階層の移動、または乗り物など人の移動に関する用語として使用されている。ジェームズが生涯を通じて、1876年にロンドン、その後ライに落ち着くまでアメリカとヨーロッパ大陸を移動していた。ここでの移動とは空間の移動に限らず、時間的移動も含む。時間的移動とは単なる時の流れを意味するものではなく、現実の時の流れとともに「意識の流れ」によって前後する時の流れについても触れる。

本シンポジウムでは「家」とモビリティをキーワードに、ジェームズ作品を歴史的、伝記的視点から見直しながら、唯物論的視点、フェミニズム的視点、幽霊と alter ego についての追及、四次元思想と SF 的側面からの考察を行っていく。

まずは堤がトポロジーについてレヴィンの思想を紹介することから始め、ジェイムズの作品中、トポスとモビリティの観点から考察可能な作品を初期の作品から円熟期に至るまでの作品をとり上げ概観していく。それぞれのトポス（場）が内包する意義について言及し、登場人物との関わり合いについて、人間関係や経済的視点から分析を行う。

続いて町田氏は『ポイントンの蒐集品』（*The Spoils of Poynton*, 1896）を中心に、絶えず移動を強いられる女性に焦点を当て、「家」という空間と家具をはじめとする所有物「モノ」との関連性を探っていく。所有物については「触覚」をキーワードの一つとして、女性の所有権についてフェミニズムの観点からも分析を行っている。

後半の2名は「懐かしの街角」（“*The Jolly Corner*,” 1908）を取り上げるが、中井氏は導入部分で『アメリカの風景』（*The American Scene*, 1907）を用いて、「懐かしの街角」が内包する、こうしたモビリティの多層性や当時のニューヨークの新移民の状況などを基に読み解ききっかけとする。主人公が遭遇する幽霊が表象しているものについても考察する。その際にジェイムズの「ねじの回転」（“*The Turn of the Screw*,” 1898）との関連性を指摘される映画「アザーズ」（*The Others*, 2001）を取り上げ、幽霊と目撃者の主客の転倒——〈現世〉と〈異界〉との〈双方向的モビリティ〉について言及する。

最後の中村氏はこれまで取り上げられることのほとんどなかったジェイムズとSFとの関係について新たな視点を披露する。20世紀前後の四次元を巡る思想の紹介から始め、ジェイムズを含む文学的コミュニティにおける四次元思想の影響について考察する。その四次元思想からジェイムズの『過去の感覚』（*The Sense of the Past*, 1917）と「懐かしの街角」のタイムトラベル的設定の分析に進み、四次元時空／四次元空間のドア、窓、家という点から本シンポジアムのテーマである「家」とモビリティという着地点に導いていく。また不可視の世界を可視化するためのツールとして作品中に取り上げられる望遠鏡や双眼鏡といった光学装置についても言及し、多彩な視点からのジェイムズの作品を読み直す機会を提供してくれている。

ジェイムズ作品における帰属意識とモビリティ

堤 千佳子

1. トポロジー的要素

トポロジーは、「位相数学」「位相幾何学」のことで、何らかの形（あるいは「空間」）を連続変形しても保たれる性質（位相的性質または位相不変量）に焦点を当てたものである。

本シンポジウムで取り扱う「トポロジー」とは、ユダヤ系心理学者クルト・レヴィン（Kurt Zadek Lewin）がそれまでの心理学に数学的思考を取り入れ、より科学的、力学的に「人間の心」を説明しようとしたものである。その表現の特徴は、図形や矢印を多用することである。人間と環境の関係性や心模様を図式化して説明するのが「トポロジー心理学」であり、彼の発明である。

トポスとはギリシア語で〈場所〉を意味し、アリストテレスや古代修辞学では、議論に関係した事柄や話題を発見すべき場所（論点、観点）を表した語である。またその〈場所〉は、空間的な配置を含むものとして古代記憶術で重視され、言葉やイメージの記憶に役立てられた。そのことは現代でも大きな意味をもつものとしてあらためて見なおされているが、〈存在根拠としての場所〉〈身体的なものとしての場所〉〈象徴的なものとしての場所〉としての意味が重要な意味をもってきている。また彼の理論の中で二つ以上の異質な社会や集団に同時に属し、両方の影響を受けながらも、そのどちらにも完全には帰属していない人間としての「マージナルマン」もヘンリー・ジェイムズ（Henry James）の作品を読み解くうえでキーとなる。

2. 20年ぶりの帰国と『アメリカの風景』——Jamesが見たアメリカの変貌

ジェイムズは1843年ニューヨークで生まれ、1915年イギリスに帰化したのち、1916年ロンドンでこの世を去った。その後再び大西洋を越え、ボストン郊外のケンブリッジで永眠している。彼の墓碑銘には「二つの国の市民にして、大西洋の両側の彼の世代の説明者」と刻まれている。彼の作品の大きなテーマの一つである「国際テーマ」を想起させる一文である。

ジェイムズの人生は移動の連続である。ヨーロッパ大陸だけではなく、アメリカ国内においても、東部地域だけではあるが、幼少期からあちこちと移動を続けている。モビリティの連続である。ヨーロッパに移住してからは時折アメリカに帰国する以外は、ほとんどアメリカとは文字通り距離を置いている。『鳩の翼』（*The Wings of the Dove*, 1902）、『使者たち』（*The Ambassadors*, 1903）を出版し、『黄金の盃』（*The Golden Bowl*, 1904）を上梓したのち、彼は1904年8月にほぼ20年ぶりにアメリカに帰国する。約1年をかけて、東海岸をはじめ、これまで訪れたことのない中西部、南部、カリフォルニアにまで赴き、アメリカの変化を体感し、その印象を集めた。彼の帰国の目的は「印象を手に入れること」であったとされる。それは何の印象なのか。約

20年ぶりに戻った故国でどのような印象を受けることを期待していたのだろうか。ニューハンブシャー (New Hampshire) をはじめ、ニューイングランドの自然の美しさに感銘を受ける一方で、特にニューヨーク (New York) を代表とする大都市における変貌には驚嘆の念を感じずにはいられないのである。ニューヨークのことを「雑然とした怪物」と呼び、「歯の欠けた櫛が逆立ちした」高層建築に圧倒される。ここでは記憶にある過去のアメリカから変貌してしまった当時の現実としてのアメリカへのモビリティ、移動が取り上げられている。

なぜ60代にして彼はアメリカへの帰郷を図ったのか？

帰国前にジェイムズは盟友ウィリアム・ディーン・ハウエルズ (William Dean Howells) に充てて「アメリカ行きは強い希望であると同時に、この上なく必要なものだと感じている」と書いている。なぜこの時期にアメリカに行く「必要性」を感じたのだろうか。ティンター (A. Tinter) やホーン (P. Horne) をはじめとする様々な評論家はその理由について論考している。

『アメリカの風景』(*The American Scene*, 1907) においてジェイムズは20年ぶりに帰国した母国アメリカにおいて常に自らが相容れない不安感や焦燥感を感じている。この作品はかつて彼が知っていたアメリカ、幼少期を過ごしたニューヨーク、青年期を過ごしたニューイングランドについてはエレジーの要素が盛り込まれているといえる。自らを「熱心な旅行者」「不安な分析者」「無情な批判者」「最近の移民」「長年の不在を悔いた帰国者」「感じやすい物語の探求者」などと定義し、母国の変容ぶりを描写している。建築物を含め、場所の変化とともに自分のよく知っていた一つの時代の終焉を描き出している。同じ場所にとどまり、その変化を自らのものとして体験せず、「旅人」としてその時々的情景を客観的に観察していたジェイムズならではの嘆きがそこに見られる。これは「懐かしの街角」(“The Jolly Corner,” 1908) の主人公がもしアメリカにずっと住んでいたならどうなっていたのかと類似している。

ジェイムズが自分の帰属する場所とみなしていたのは、現実のアメリカでもヨーロッパでもなく、彼の記憶の中に存在し、彼自身の手によってリライトされたアメリカの幻影であったといえるのかもしれない。

3. James とトポスとモビリティ

ジェイムズにとって重要なトポス(場)は彼の主要なテーマの一つである「国際テーマ」に描き出されているようにヨーロッパとアメリカというように端的に2分することができる。その中でそれぞれのトポス(場)が表象するものは異なっている。ジェイムズはその生い立ちからして常に確固たる根差す場所を持たず、アメリカとヨーロッパ大陸を移動し、最終的にライ (Rye) に居を構えることとなった。移動する過程で、それぞれの場所において、アメリカ人コミュニティに所属し、自らの小説家としてのアイデンティティを確立しようと試みることもあった。その際に橋渡しとなるのが、小説以外に芸術が挙げられる。芸術家との交際、美術品収集家、イザベラ・スチュワート・ガードナー (Isabella Stewart Gardner) との知遇により、両者を結び付け、またそれにより小説の題材を発見することもあった。アメリカ以外の場所におけるアメリカ人コミュニティの中でのコミュニケーションについても考察していく。海外に在住するアメリカ人たちは「国際テーマ」を扱った作品で取り上げられることが多いが、大半が自らのアイデンティテ

ィを確保するために、同国人同士で排他的コミュニティを作り、そのコンプレックスを隠している。モビリティに付随する他者との交流を限定的なものにすることは、モビリティに伴うコミュニケーションカビリティとは相反する側面を持つことにもなりうる。

重要なトポスを扱ったものとしてここでは初期と円熟期 (Major Phase) の2つの作品について分析してみる。

例えば初期の名作「デイジー・ミラー」(“Daisy Miller”, 1878) においては、舞台となるのはスイスのヴヴェイ (Vevey)、イタリアのローマ (Rome) であるが、重要なトポスとしてアメリカのニューヨーク及びスケネクタディ (Schenectady) 及びスイスのジュネーヴ (Geneva) を失念してはならない。この4つのトポスが表象するものはそれぞれ異なり、まずは主人公デイジーの出身地であるスケネクタディは工業都市であり、父親のビジネスの場であり、ミラー一家の生活を作り出す場でもある。また実際に作品には登場しない父親の支配する父権の場でもある。一方、ニューヨークはデイジーにとって、華やかな社交の場であり、他者の目を気にせず自由にふるまえる場、父親や母親の支配から逃れ、人生を享受できる場でもある。ヴヴェイはスイスの保養地であり、語り手であるフレデリック・ウィンターボーン (Frederick Winterbourne) と出会う場でもある。デイジーにとっては、ヨーロッパと、ヨーロッパ人を知る場でもある。世界中から保養に訪れる観光地でもあることから、開放感をもって堪能している。同じスイスであっても間接的にしか扱われないジュネーヴについてはカルビン派の重要な拠点であり、ウィンターボーンが留学し、その後もある魅力的な婦人にひかれて、滞在し続ける場でもある。ここでは娘を守る母親の存在感が強いとされ、デイジーの母親像とは全く対照的である。そしてローマである。ここではアメリカ人社交界が厳然と存在し、そこでの暗黙のルールに従わないものは排除される。デイジーも最初はわからないからと猶予されていたが、度重なるルール違反にローマのアメリカ人社交界から排除される。そして最終的にはウィンターボーンの忠告を無視して、マラリアにかかり若い命を落としてしまう。ただデイジーが埋葬されるのはローマの外国人墓地であり、彼女は死後アメリカに帰国することがかなわない。直接的に場面に登場しない、スケネクタディとヴヴェイが父親、母親の支配権の強い場所であることは着目すべき点であろう。ウィンターボーンは「あまりにも長くヨーロッパに滞在しすぎて、アメリカ人の本質がわかると解釈されるが、トポロジ的に考えると、彼もまた「マージナルマン」であると解釈することが可能である。

『鳩の翼』ではプロットの進行とともに場面が移動していく移動性、モビリティがリンクしている。主人公ミリー・シール (Milly Theale) の財産を狙う動きが描き出されているこの作品では遺産、遺贈、財産の入手方法など金にまつわる話題に事欠かない。興味深いのはこの作品の舞台はニューヨーク、スイス、ロンドン、ヴェニスと移動していくが、かつて金融の中心地が、ヴェニス、ロンドン、ニューヨークへと移動していったのと流れが逆になっていることである。作品ではミリーがヴェニスにおいて周囲の人間の前から姿を消し、その死が間接的に伝えられてから、舞台はまたロンドンに戻り幕を閉じる。

ニューヨークは回想シーンやミリーについての背景的説明の場面で言及されるだけで直接的には作品の表舞台に登場してこない。ただニューヨークはミリーが莫大な財産を継承した場であり、彼女の一族がその財産を築き、継承していった場である。スイスは「デイジー・ミラー」の場合と同じくアメリカからヨーロッパへの移動、モビリティの通過点なのである。ロンドンはケ

イト・クロイ (Kate Croy) が中心となるリアリズムの要素が色濃く描かれ、一方ヴェニスにはミリーが中心となり、ロンドンとは対照的にアレゴリカルでロマンス的要素の濃い世界観で描写されている。

ローマの扱いについては『ロデリック・ハドソン』 (*Roderick Hudson*, 1875) と『ある婦人の肖像』 (*The Portrait of a Lady*, 1881) でもさらに異なる。この都市には永遠や過去の栄光が含蓄されている。「デイジー・ミラー」では月明りのコロッセオでウィンターボーンがジョヴァネリ (Giovanelli) と一緒にデイジーを目撃するが、そこでは猛獣の餌食となるキリスト教徒の殉教のイメージが用いられている。『ある婦人の肖像』では主人公イザベル (Isabel) はこのコロッセオで人類共通の苦悩と自らを重ね合わせる、彼女の内面の成長を感じさせる場面である。『ロデリック・ハドソン』では主人公ロデリックはローマで古代美術、寺院、彫刻、絵画を鑑賞し、芸術の道にまい進するが、失恋とスランプを経験し、最終的にはアルプス山中で遭難、転落死する。彼にとってローマは芸術の歓喜とともに挫折と失望を味わう場所である。

このようにジェイムズの作品におけるトポス (場) には様々な意味が込められている。やや類型化されている面もあるが、後期に行くにしたがって含有するものは深化している。またそれぞれのトポス (場) に付随する経済的 (金融的) 観点からも作品の論考を行うことへの可能性も大いに期待できる。

引用文献

- Edel, Leon. *Henry James, a Life*. (London: Collins, 1987)
- Gale, Robert L. *A Henry James Encyclopedia* (New York: Greenwood Press, 1989)
- Horne, Philip. "Revisiting and Revisions in the New York Edition of the Novels and Tales of Henry James." *A Companion to Henry James*. Ed Greg W. Zacharias. (Malden, MA: Wiley-Blackwell, 2008 208-30)
- James, Henry. *The American Scene* (1907) Introduction. John F. Sears Penguin. 1994
青木次生訳『アメリカ印象記』アメリカ古典文庫 10 研究社
- . *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers (New York: Oxford University Press, 1987)
- . "Daisy Miller: A Study" (London: Penguin Classics, 2007)
- . *The Portrait of a Lady*. (New York: Charles Scribner's Sons, 1908)
- . *The Wings of the Dove* (New York: Charles Scribner's Sons, 1908)
- Tintner, Adeline R. *The Twentieth-Century World of Henry James: Changes in His Work after 1900*. (Baton Rouge: Louisiana State UP, 2000)
- 奥野健男:『文学のトポロジー』(東京:河出書房新社, 1999)
- クルト レヴィン:『社会科学における場の理論 (社会的葛藤の解決と社会科学における場の理論)』(東京:ちとせプレス, 2017)

ジェイムズ作品における仮住まいと仮所有 ——*The Spoils of Poynton* を中心に

町田 みどり

序

ジェイムズ作品には暮らしていた住まいを追われ、絶えず移動を続ける女性たちがしばしば登場する。『ポイントンの蒐集品』(*The Spoils of Poynton*, 1896) に登場するフリーダ・ヴェッチ (Fleda Vetch) もそのひとりである。作品ではブリグストック (Brigstock) 家、ヴェッチ家、妹の新居、ゲレス (Gereth) 家、ゲレス氏の伯母の家と五つの家が登場し、フリーダはそれらを移動し続け、常に仮住まい状態にある。本発表では『ポイントンの蒐集品』をとりあげ「移動」する女性と「家」空間および「もの」との関係性を探る。

1. 「家」と「もの」

「家」についての考察にあたって、いくつかの理由から本発表では「もの」とひととの関係性が中心となる。ひとつめの理由は当時の室内装飾流行という文化的背景である。ジェイムズはNY版序文において作品執筆の経緯を語り、母子の遺産争いの逸話をもとに当時の「骨董熱」に光をあてようとしたという。この「骨董熱」は、周知の通り英米における室内装飾流行の一部である。室内装飾流行は産業革命以降大量生産が可能になったことにより、それまで富裕層にのみ所有可能であった装飾品が下の階層までも入手可能になったことを背景としている。また室内装飾はドメスティック・イデオロギーにより家庭を活動の領域とされた女性にとって、パーソナリティを示すものとされた。その担い手を勤めていた中産階級の女性にとって室内の「もの」は特別な意味をもっていたのである。

ふたつめの理由として女性の財産権における特殊な歴史的状況が挙げられる。「所有」という人と「もの」の主要な関係性の観点からヴィクトリア朝小説を考察したデボラ・ワイン (Deborah Wynne) によれば「所有」への欲望は、人間的条件の基本のひとつとして位置付けられ、所有の継続は環境のコントロールを意味している。しかし、女性の場合イギリスでは19世紀後半の法改正に至るまでは所有権が制限され、特に家や土地という不動産の所有権は認められておらず、それらを所有することは女性のジェンダー規範に背くものとされてきた。他方、家具、衣装や装身具のような動産は規制がゆるく、所有が認められていた。このような社会背景のもと女性にとって動産は経済的価値にかかわらず、自ら所有し、遺言 (will) によって子孫に残し、時間軸上において自己の存在を記すことが可能であるという点で感情的価値が高かった(26)。つまり、家や土地を所有できない女性にとって「もの」は単なる「もの」以上の意義をもっていたのである。

最後の理由としては現象学的地理学における「家」の概念が挙げられる。人文主義地理学の創始者とされるイーファー・トゥアン (Yi-Fu Tuan) は「家」空間を構成するものは建築物そのものではなく「内部」「内部にあるもの」と主張する。「家」は部屋の内部や窓といった個々の構成要素、また視覚的なイメージではなく触覚や嗅覚によって喚起されるという。「家」という空間は居住する人間と空間の実態として、住人が所有する「もの」によって構成されており、その「もの」との関係においては触覚が重要な役割を果たしているのである (256)。

以上の点から、本作品内の「家」を考察するにあたり、住人が所有し陳列している「もの」と所有者との関係性に焦点をあてて考察する。

2. 家の比較

まず新興中産階級ブリグストック家の家について考察する。端的に言えば彼らの家は新興中産階級の自己確認の場である。彼らの家を構成している「もの」は複製技術によって大衆にも入手可能となった大量生産品であり、芸術や技術の大衆化の産物である。スーザン・ステュアート (Susan Stewart) のスーヴェニアとコレクションの対比論はブリグストック家、ゲレス家のそれぞれが所有する「もの」と彼らとの関係を理解する上で示唆に富んでいる。ステュアートによれば、スーヴェニアは所有者の経験の構成要素の一部を取り出し、メトニミー的な機能を持ち、所有者の「自伝」を構成するものとなる。メトニミーという象徴機能が焦点化されるスーヴェニアにおいては、「記号価値」が「交換価値」や「使用価値」よりも優先されるため所有者の経験との関わりの度合いがその価値基準となり、所有者以外の人間の価値基準に照らし合わせれば、無価値に見えるということさえありうるという。

このような観点から見るとならばブリグストック家に陳列されているさまざまな記念品・土産物や素人絵画は一家の社会的・経済的上昇の軌跡のメトニミーであることが理解される。新興中産階級である一家のステータスは安定したものとはいえない。従って、一家は自己の活動、消費の結果を自己の延長・代替物として、家の中にディスプレイする。家はいわば自分を映す鏡として機能している。そして鏡像においては、視覚が支配的になり「本もの」らしく「見える」ことが最重要となる。モナ (Mona) にとってもオーエン (Owen) との結婚の成功を示す記号が重要であり、世に名高いポイントンの蒐集品へのモナの固執は、その獲得が彼女の社会的階梯上昇の記号となるからである。モナにとって記号だけが必要であったことは結婚後屋敷にはほとんど住まなかったことから明らかである。モナの結婚はメディア報道によって最大限に記号化され広く共有される。家が階級上昇確認の鏡だとすれば、モナはメディア報道という新しい鏡を得たため、もはや家すら必要がない。

一方ポイントン屋敷は所有者とももの関係性、「もの」と人を媒介する感覚において対照的である。ブリグストック家の「もの」は、所有者の経験の記号表現であり、その価値は所有者との関係性に依存している。他方ポイントン屋敷では人と「もの」との関係は対等あるいは逆転している。「もの」それぞれに時間・空間的起源と作り手の個性が刻み込まれ、「もの」それ自体の物語と独自の価値を有している (22)。「もの」と人を媒介する感覚も異なり、ブリグストック家の場合記号として視覚によって媒介されているのに対し、ポイントン屋敷の場合は、触覚に重点が

置かれている。家具類を中心に人との接触によって得られる「もの」の物質的実在性とフリーダやゲレス夫人の触覚を通じた印象に焦点があてられている。

「触覚」の強調に含蓄される意味の理解においては消費社会研究家のグラント・マクラッケン (Grant McCracken) の「古光沢 (patina)」という概念が有効である。マクラッケンは、「もの」における階級差の指標として「古光沢」を挙げた。「古光沢」とは「家具、金銀食器」等そのほか人による制作物が長年にわたるさまざまな接触によって生じるものであり、所有品の古光沢の有無こそ所属階級を示す決定的な指標である。ブリッグス家の屋敷は至るところにニスが塗られ、古光沢に欠け、新興富裕層の典型例となっている。

この「古光沢」は眺めるという視覚的な働きかけではなく、長い年月に渡る身体器官の接触によって獲得されるものである。ジェイムズはポイントン邸ではとりわけ「手」による接触を強調し、「もの」の獲得後に「もの」を扱う二種類の「手」を描いている。ひとつは鑑賞し楽しむ手である。ゲレス夫人やフリーダは「もの」に「触れる」ことによってエロティックな快楽を楽しんでいる。女性が性的な主体となることを抑圧されたヴィクトリア朝にあって、ジェンダー規範内で女性が「もの」に触れて感触を楽しむ行為は「もの」との関係において「所有」とどのように意義深く、日々これらのものに触れることは主体の実在確認にもつながるのである。もう一つの手は「手入れ (care)」をする手である。ポイントン蒐集品の価値は入手に際して投資された時間と金銭のみから生じているわけではない。ジェイムズは蒐集品の手入れを自ら行うゲレス夫人の「手」の芸術家としての働きを強調している。放置すれば単なる「古物 (old things)」のまま朽ちていく可能性がある「もの」は、価値を見いだされ、価値あるものとして手入れされ続け、その行為への「応答 (reaction)」として輝きを放つ。すなわち骨董品と呼ばれるものにおいては、「もの」と人が相互に依存しあい、その相互行為の中で古光沢を帯び美という現象が生じる。ゲレス夫人の「もの」崇拜についてジェイムズは揶揄するような態度も示す一方、古物が芸術的な工芸品として維持され続けるためには日々の「手入れ」という労働の必要性を認めていると思われる。このことは「所有」行為についても暗示的である。

マクラッケンによれば消費財が個人の所有物となるために必要とされるのは「手入れ儀式」である。「もの」から引き出された意味は壊れやすく、その意味が維持されるためには「絶えず保全する必要」がある (63)。本作品におけるさまざまな「古物」はこのマクラッケンの主張の好例となっている。製作時にどれほど美的価値、市場価値が高いものであっても、現在の所有者が審美眼を持たず、放置すれば時間とともに劣化し、骨董品として価値を持つことはなく単なる古物でおわる。古物は、審美眼だけではなく、日々の「手入れ」という現在の所有者の働きかけがあってこそ価値ある骨董品たり得る。すなわち静的な存在ではなく、「もの」と人との相互行為の中で生じる現象の物象化といえよう。ポイントン屋敷はゲレス夫人の審美眼、日々の「手入れ」によって存在を保っていたのであり、新しい所有者オーエンとモナによって顧みられなくなったポイントン屋敷はその生を保つことができない。屋敷の焼尽はその象徴的な家の死である。ここから理解されるのは家はそれ自体では家たり得ず、そこに住まうものとの相互行為によって立ち現れる現象として捉えられているということである。

3. 「家」の創出

本作品に登場する家を考察する場合、対立する登場人物の住まいブリグストック邸とポイントン屋敷が焦点化される。その一方でゲレス夫人の仮住まい、その後本住まいとなるリックス(Ricks)の屋敷は等閑視されている。しかし、ゲレス夫人の終の住処となるということ点において看過しがたく、同時にポイントンには欠けている幽霊が出る屋敷として言及されている点でも注目に値する。

ポイントン屋敷と蒐集品の喪失はゲレス夫人のアイデンティティ喪失とみなされることが多いが、ジェームズはリックスの屋敷におけるゲレス夫人の再生を描き家の喪失は回復不可能なものではないということを示唆している。ゲレス夫人は最初にリックスに移り住んだ際には先住人の持ち物を取りさり、蒐集品を持ち込み先住人の存在を抹消することで所有権の上書きを行った。しかし、全てを喪失した後に移り住んだ際、喪失を経験したゲレス夫人は、先住人の残したものをもとに「手入れ」と配置の妙によって新たな家空間の創出に成功する。フリーダはその手腕こそが夫人の天賦の才と賞賛し、夫人を蘇らせる。ジェームズはポイントン屋敷の場合とどうようにここでも「手」による価値の「享受」と「世話」が価値創造であることを強調している。

住み慣れた家と蒐集品を失い他者の家、他者の所有物に囲まれて暮らすことになったゲレス夫人の再生は定まった家をもたない／もてない者がいかに「家」空間を創出するかという点について示唆的である。「家」は、固定された空間ではなく、いずこであれ与えられた空間と主体との相互作用の中に出現する。古物が価値の享受と世話という持ち主からの働きかけに対し、その「反応」として光沢を帯び、美を持ちうるように、「家」もまた住む者の価値の享受、働きかけによってそこに現出するような空間とされていると考えられるといえよう。

4. 結語にかえて——フリーダと「もの」からの解放

フリーダにとっては鞆にいれて運ぶことができるものだけが、自分の所有物であり、過去から現在へとつなぐものである。オーエンの最後の贈り物は彼女が鞆にいれて運ぶことのできるマルタの十字架であったが、彼女がこのマルタの十字架を受け取っていたならば、どこで暮らそうともそれをもとに自分の「家」空間を作り出したに違いない。しかし、その所有は実現しない。フリーダがマルタの十字架をオーエンの愛、モナへの勝利の象徴という記号化行為を冒すことになるからである。それはポイントンの蒐集品を成功の記号と見なしたモナと同じ行為であり、ジェームズはそうしたメトニミー的な所有をフリーダには許していないのだ。もうひとつの理由は、フリーダの「もの」からの解放である。ジェームズは『アスパンの手紙』(*The Aspern Papers*, 1888)においてアスパンの手紙とともに朽ちていくジュリアナ(Juliana)とその姪の物語を描いたが、どのようにオーエンの贈り物とともに暮らし続けることは、過去との連続性は担保されても過去の幸福の夢想に浸り続ける閉塞的な生活、未来の喪失をもたらす可能性があるのだ。「もの」は連続性を約束すると同時に過去による束縛というふたつの側面があり、ジェームズはその束縛からフリーダを解放している。作品最後の場面が駅であることは象徴的である。物語はポイントン屋敷を訪れようとするも屋敷が焼尽したことを知り、フリーダがふたたび列車に乗ろうと

する場面でおわる。それは過去の栄光であったかもしれないものにとどまることなく、移動し続けるフリーダのこれからの未来をも象徴している。どこにも住んでいないからこそ、その都度相互作用によって自分の空間をつくっていくことができるのだ。

引用文献

James, Henry. *The Spoils of Poynton* Vol. X of the New York Edition.

Stuart, Susan. *On Longing: Narratives of the Miniature, the Gigantic, the Souvenir, the Collection*. Duke UP, 1984.

Wynne, Deborah. *Women and Personal Property in the Victorian Novel*. Burlington. Ashgate, 2010.

イーファー・トゥアン 『個人空間の誕生－食卓・家屋・劇場・世界』, 阿部一訳, 筑摩書房, 1993年.

グラント・マクラッケン 『文化と消費とシンボルと』, 小池和子訳, 勁草書房, 1990年.

「懐かしの街角」(“The Jolly Corner”)における多層的モビリティ ——旅行・移民・異界

中井 誠 一

幼少期からアメリカとヨーロッパを行き来していたジェイムズにとって、「移動」はまさに人生の常態的テーマであり、〈モビリティ〉こそが彼の特異なコスモポリタンの作品を作り上げる原動力となっていることは論を待たない。その最大のハイライトのひとつが、1904年、21年ぶりに決断したアメリカへの一時帰国である。長年の間に変化したアメリカを自分の目で確認し、その印象を創作の糸口にしたかったジェイムズは、その旅行の体験を基に、1907年に紀行文『アメリカの風景』(*The American Scene*)を著す。そしてその翌年には「懐かしの街角」を発表して、目論見通り短編小説に結実させることになる。しかし、この短編に内包された〈モビリティ〉は、主人公の帰国という表面的で一方通行的なものだけではなく、多層のかつ双方向的な様相を呈しているように思える。この発表では、「懐かしの街角」が内包する、こうしたモビリティの多層性を『アメリカの風景』や当時のニューヨークの新移民の状況などを基に読み解き、幽霊が表象しているものについて考察する。

物語の主人公スペンサー・ブライドン (Spencer Briden) は、23歳でアメリカを離れ、33年間ヨーロッパで気ままな生活していたが、二人の兄の急死に伴い、相続した屋敷を管理するためニューヨークに戻ってくる。そこで彼は、急速に産業化され、高層建築が乱立し、富と権力が渦巻くアメリカ社会を見出して驚嘆することになる。ブライドンが相続した二つの屋敷の一つは現在高層アパートに改築中なのだが、その仕事に関わるうちに、彼は自分にビジネスの才があるのではないかと考え始める。そして、もしアメリカに残っていたら摩天楼を建て大金持ちになっていたのではないかという可能性を想像し始めるのである。

そして彼は、自分の家族が三代に渡って生活した屋敷の中で、友人のアリス・スタヴァートン (Alice Staverton) の言う「故国にとどまっていたら」ありえたかも知れない自分、つまり、近代物質文明の中で過ごした自らの分身 (オルターエゴ) ともいべき幽霊を探索することになるのだが、その探索劇はかなり奇妙なものであった。彼は夜中に屋敷中の部屋を階上から階下へと「はいずり回る」のだが、逆にその実現することのなかった過去の可能性の存在というべき幽霊も追跡をかわしてはいずり回っているように感じるのである。こうしてブライドンは、屋敷の中を延々と幽霊を求めて〈移動〉し続け、ついにある夜、一階の控えの間で、硬直したようにたたずんでいる幽霊のような存在に向き合うことになる。

この作品における最大の論点は、この幽霊の正体であり、それを中心とした物語の解釈であろう。もちろん、表面上のプロットにそって言えば、この幽霊は、ブライドンの実現することなかった過去の可能性、つまりビジネス界で頭角を現したオルターエゴが、物質的な成功の見返りにその苦悩の表情や欠けた二本の指に精神的な欠落を暗示させる姿として現れたものとしてみるのがもっとも一般的な解釈と言ってよい。近年では、人種やセクシュアリティ、階級など、様々

な論点・理論から解釈されている。たとえば、ステファニー・ホーキンス (Stephany Hawkins) は、アメリカ国民の精神の深みに根差している白人黒人混血の可能性を無意識に表していると結論付けており、エリック・サヴォイ (Eric Savoy) は、その幽霊を「同性愛を隠す分身」と見なし、アリスとの抱擁で終わる結末をヘテロセクシュアルな自己への端緒を示していると解釈している。

こうした多様な解釈を生むのは、もちろん後期ジェイムズに典型的な韜晦的描法が関わっている。実際にオルターエゴとも言える存在が現れるまでは、多用する間接話法と比喩表現の描写の中で、幽霊がただ彼の意識の中だけで感じられるものなのかを確定することが困難であり、前述のように、ブライドンと分身のどちらがどちらを追い求めているかさえ曖昧になってくるのである。そして、このような、追うものと追われるものの主客が逆転する〈双方向的モビリティ〉について、ブライドン自身が「概して、幽霊を怖れる人は多いが、一体誰がそのような形勢を逆転させて、自分自身が計り知れない恐怖のもととなったであろうか」(457) と強く意識しているのである。

この幽霊的存在の主客転倒という観点を物語から抽出したとき、連想的に思い出される映画がある。それはスペインの映画監督アレハンドロ・アメナーバルの名作『アザーズ』(*The Others*, 2001) である。ジェイムズの『ねじの回転』(“The Turn of the Screw,” 1898) をヒントに作られたこの作品では、幽霊を恐れながらその正体を探索して屋敷内を巡る主人公グレースたちが最後に発見するのは、この屋敷に取りついている霊と交信をしている家族と霊媒師であった。つまり、彼女たちが恐れ、探索していた幽霊の正体は実はこの世に生きている人間で、自分たちこそが異界の幽霊だったという事実である。そして、この映画と短編に共通する重要なモチーフは主客の転倒——〈現世〉と〈異界〉との〈双方向的モビリティ〉と言えるであろう。いったい幽霊はどちらなのか。はたしてどちらがどちらを恐れているのか。確かに「懐かしの街角」において、誰もいないはずの屋敷で夜中にろうそくを持って「這いずり回る」ブライドンの姿はまさに亡霊的と言える。また、彼は屋敷の窓を通して見える街路の明りを、「それは現実の、人間の、世間の明りだった。それは、彼がこれまで暮らしてきた世界の明りなのだ」(458) と、まるで自分が現世とは別の世界にいるかのように述べたり、今いる屋敷の外の世界を“other life”と表現したりするのである。

それでは、このように実際にせよ比喩的にせよ、亡霊的な存在として屋敷を這いずり回ったブライドンがついに控えの間で遭遇した不気味な存在はいったい何なのだろうか。この分身の存在について新たな解釈を導く重要な手がかりとして、『アメリカ印象記』の中で特筆されている、ジェイムズを震撼させたもう一つの衝撃的な体験——アメリカに流入する膨大な数の移民の状況を取り上げてみたい。当時、急成長する産業の低賃金の働き手として、特に東欧や南欧から大量の新移民がアメリカを訪れており、1905年にはその数は100万人を突破している。特に移民が最初に入国する都市としてはニューヨークが圧倒的に多く、ジェイムズは、エリス島の移民局を見学した時の驚きを「探訪の行きと帰りとは見学者はまったく別人になっている」(AS 426) と表現して、その衝撃の凄まじさを伝えている。しかも、おびただしい数の外国人が集まっている移民局内部の様子を、彼は次のように描いているのである。「移民局のあの驚くべき中庭式区画が不気味に照らし出した真実は、彼[見学者]の存在の根底をゆすぶる——すくなくとも私に

は、ゆすぶるとしか考えられない。心に新たな悪寒をおぼえたしるしとして、その後いつまでも、見る目をもつ人の目に彼は一変した表情を浮かべて歩き回っている、と私は考えたいし、考えなければならぬ必要を感じる。亡霊を見るという——安全と思われていた古いわが家の中で幽霊に出会うという——有難くない特権を手に入れた人物には、そのような人目につく刻印が押されるのだ。」(AS 456)

これは、「懐かしの街角」の解釈では、研究者に言及されることがほとんどない引用だが、注目すべきは、この描写が、まるでこの短編のプロットのエッセンスを抽出したかのような表現となっていることである。また、ジェイムズは、ニューヨークのロワー・イーストサイド地域に群がるユダヤ移民の様子を、彼らの容貌の特異性を示しながら克明に描いているが、イスラエルの民の歴史の一章がニューヨークに刻まれつつあることに、ある種の「不吉さ」を感じ取る際の際のような描写も同様に注目に値する。「同時に私は、その『少数民族の』亡霊がふたたび晚餐の席の骸骨のように姿を見せたのを感じ、興ざめた思いを抱いた。ユダヤ人によるニューヨーク征服がどの程度まで進んだかを示す事実や数字、詳細な一部始終を晚餐のテーブル越しに聞いていた私を、まるでその亡霊が歯をむき出して冷笑したかのような、そんな印象が感じられた。(中略) 発展するアメリカ社会の諸相の中でも、それを目前にしたときには大きな感激も非常な驚きも同じように空しいと感じさせられる、あの不吉そのものの要素を、私がこのときほど意識したことはなかった。」(AS 465-6)

ここでジェイムズは、「移民」を「幽霊」に例えて、それを漠然とした「恐怖」や「不吉さ」と結び付けて描いている。「懐かしの街角」の源泉ともなったアメリカ再訪を記した旅行記である『アメリカの風景』のこれらの描写を、適切な配置で並べ直すと、極めて興味深く、意味深い繋がりが見えてくる。こうした繋がりに考察してみると、ブライドンが控えの間で遭遇した不気味な存在は、たとえ現実の移民ではないとしても、ジェイムズの心の底に宿っている、増大する移民に対する原初的な「恐怖」や「不吉さ」を具象化したものだとして解釈できるであろう。

物語の最後の場面で、アリスは、ブライドンが見たという幽霊の存在はブライドンのオルターエゴだったのかもしれないという余韻を残しながらも、その同一性を否定している。この謎めいたやり取りから我々が感知できるのは、その人物は、何からの意味で彼の存在を表象するものだという点である。つまり、これまで述べてきた主客転倒の観点からすると、それは幽霊／移民のどちらとも受け取ることができ、そして、ブライドンもまた同じく、幽霊／移民どちらとも捉えられるということである。30年以上の歳月の後に、ただ財産を見るためだけに戻ってきた彼もまた、ジェイムズが自らを「最近の移民」と呼ぶように、このアメリカの地では〈新移民〉のような存在になっているからである。

このように、この作品には、ヨーロッパ／アメリカの、アメリカ人／移民の、そして現世界／異界のモビリティという多層的なモビリティが内包されており、主人公ブライドンは、それらを双方向、あるいは縦断的に移動しながら、最終的に、幽霊そして移民を表象する存在となっていると言えるのである。

主要参考文献・映画

- Hawkins, Stephanie. “Stalking the Biracial Hidden Self in Henry James’s *The Sense of the Past* and ‘The Jolly Corner.’” *The Henry James Review* 25 (2004) : 276-84.
- Horne, Philip. “Henry James and ‘the forces of violence’: On the Track of ‘big game’ in ‘The Jolly Corner.’” *The Henry James Review* 27 (2006) : 237-47.
- James, Henry. *The American Scene*. Henry James, Collected Travel Writings: Great Britain and America. The Library of America, 1993. (本文括弧内に AS としてページ数を表記)
- . “The Jolly Corner.” Vol.XVII of *The Novels and Tales of Henry James*. New York: Charles Scribner’s Sons, 1939. (本文括弧内にページ数を表記)
- Baldev Vaid, Krishna. *Technique in the Tales of Henry James*. Harvard University Press, 1964.
- Osborn, Andreas. *Henry James and the Expanding Horizon: A Study of the Meaning and Basic Themes of James’s Fiction*. New York: Greenwood Press, 1969.
- Savoy, Eric. “The Queer Subject of ‘The Jolly Corner.’” *The Henry James Review* 20 (1999) : 1-21.
- Warren, Kenneth W. “The Jolly Corner.” *A Norton Critical Edition: Tales of Henry James*. ed. by Christof Wegelin and Henry B. Wonham. W. W. Norton & Company, 2003.
- ヘンリー・ジェイムズ『アメリカ印象記』青木次生訳、アメリカ古典文庫 10、研究社、1976 年。
(本文翻訳として参照)
- 映画『アザーズ』(*The Others*)、アレハンドロ・アメナーバル監督、ニコール・キッドマン他出演、2001 年 (DVD、ポニーキャニオン、2002 年)

四次元思想と James の「家」 —— “The Jolly Corner” を中心に

中 村 善 雄

1. 20 世紀前後の四次元を巡る思想

ノースロップ・フライ (Northrop Frye) はヘンリー・ジェイムズ (Henry James) の未完長編『過去の感覚』(*The Sense of the Past*, 1917) を “time-travel”、短編「懐かしの街角」 (“The Jolly Corner”, 1908) を “parallel worlds” の物語と評している (214)。この文脈での解釈はほぼ皆無であったが、2010 年代後半に入り、四次元思想と文学の関係性を論じる論考が出始め、ジェイムズ作品の SF 的読みにも光明が見出されるようになった。

四次元と言えば、アルベルト・アインシュタイン (Albert Einstein) が 1905 年に発表した特殊相対性理論が挙げられるであろう。それはニュートン力学による絶対時間や絶対空間を否定し、三次元空間と一次元の時間を結びつけた四次元時空を取り扱っている。しかし相対性理論以前に、四次元世界をめぐる思想が数学、物理学、哲学、心理学といった諸領域から検討された。四つ目の次元を時間と考える四次元時空と異なり、四つ目を空間と見なす四次元空間の概念も存在した。その多次元空間の理解に多大な貢献をしたのが、『科学的ロマンス集』 (*Scientific Romances*, 1884) を執筆した数学者チャールズ・ハワード・ヒントン (Charles Howard Hinton) である。同じく風刺小説『フラットランド——多次元の冒険』 (*Flatland: A Romance of Many Dimensions*, 1884) を執筆したエドウィン・A・アボット (Edwin A. Abbott) の名も忘れてはなるまい。四次元思想の中には、幽霊や亡霊といった超自然現象を多次元の枠組みで説明する試みもなされた。天体物理学者フリードリヒ・ツェルナー (Friedrich Zöllner) を始め、高名な学者の中にも幽霊を三次元とは異なる次元の産物と関連付ける論者もいた。四次元思想の内容は多岐にわたるが、19 世紀末にかけて将来に漠たる不安を抱えた時期に、不可解・不可知なものへの理解や新しい知の地平の表象として、四次元というテーマが諸学問の領域から論じられたのである。

2. 文学的コミュニティにおける四次元思想の影響

四次元思想は知識人の中で議論を呼び、ジェイムズの属する知的サークルにも波及した。このコミュニティには、他にジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad)、フォード・マドックス・フォード (Ford Madox Ford)、ステイーヴン・クレイン (Stephen Crane)、H・G・ウェルズ (H. G. Wells) が参加しており、各作家の文学的想像力を喚起したことは想像に難くない。コンラッドとフォードが共作にて四次元世界を主題とした『相続者たち』 (*The Inheritors*) を 1901 年に発表したのはその一例である。それ以上に有名なのは、ウェルズの一連の作品であろう。特に彼の代

表作『タイム・マシン』(*The Time Machine*, 1895)では「現代の数学的思考」(“Modern Mathematical Thought”)にて四次元空間の存在を主張した数学者サイモン・ニューカム(Simon Newcomb)を引き合いに出しながら、主人公の時間旅行家と彼の友人の医者や心理学者が四次元思想について議論する場面が挿入されている。

ジェイムズも四次元思想とは無縁ではない。ジョアン・リチャードソン(Joan Richardson)は、四次元に関する問題はジェイムズが常連の寄稿者であったレビューやジャーナルで取り扱われ、空間や時間や知覚をめぐる従来の概念への重要な挑戦を彼が知っていたと指摘している(153-54)。エリザベス・L・スレシュ(Elizabeth L. Throesch)によれば、ジェイムズがヒントンの著作を読んだ確証はないが、兄ウィリアム・ジェイムズ(William James)とヒントンは、イギリスの哲学者でプラグマティズムの先駆者シャドワース・ホジソン(Shadworth Hodgson)を介して知人であった。ハーバード大学のホートン図書館には1892年から1907年にかけて両者の間で交わされた11通の書簡が所蔵されており、ヘンリーもヒントンの考えに通じていたことを指摘している。スレシュはまたヘンリーが、彼の親友ジョージ・デュ・モーリエ(George du Maurier)の、四次元を扱った作品『火星人』(*The Martian*, 1897)の書評をした事実を挙げている(109-11, 168)。

3. 『過去の感覚』と「懐かしの街角」のタイムトラベル的設定

20世紀前後の時代風潮とジェイムズを取り巻く状況を踏まえれば、彼が四次元思想の影響を受けた作品を執筆するのは自然なことであろう。『過去の感覚』や「懐かしの街角」はその成果と言える。『過去の感覚』は、アメリカの歴史家ラルフ・ペンドレル(Ralph Pendrel)が相続したロンドンの家を訪れ、そこで同姓同名にして、全くの瓜二つである18世紀を生きるラルフ、つまり分身と出会い、両者が入れ替わる物語である。しかし「タイム・パトロール」や「タイム・パラドックス」の問題に直面し、1900年頃に執筆が中断され、執筆再開に至るまで14年の歳月を要した。その中断期間に、『過去の感覚』と類似したテーマをより扱いやすい形で著したのが「懐かしの街角」である(Waters 192)。両作品の親和性を裏付けるように、「懐かしの街角」もタイムトラベル的要素を有している。

ジェイムズは1904年8月から翌年7月にかけて、21年ぶりにアメリカを再訪したが、その時の体験が印象記『アメリカの風景』(*The American Scene*, 1907)として刊行された。その際、ニューヨークの変貌ぶりにジェイムズは驚き、時の経過によって同一の場所が一変する現実を目の当たりにした。ゆえに『アメリカの風景』はジェイムズにとって未知なるアメリカと直面したタイムトラベルの物語と言える(Waters 183)。一方、「懐かしの街角」は『アメリカの風景』の「ニューヨーク再訪」の章が世に出た、数カ月後に執筆されている。この短編ではヨーロッパ在住の主人公スペンサー・ブライドン(Spencer Brydon)が、33年ぶりに自身の家を見るためにニューヨークを再訪するが、ジェイムズ同様の驚きを示している。「懐かしの街角」はジェイムズの印象を如実に反映し、ブライドンにとってもその再訪は一つのタイムトラベルと化しているのである。加えて、『過去の感覚』においてラルフが18世紀の分身と出逢うように、「懐かしの街角」でもブライドンが、ニューヨークの家で生き続ける分身、つまりパラレル・ワールドのオ

ルターエゴと遭遇することになる。

4. 四次元時空／四次元空間のドア、窓、家

このように両作品のテーマ性は類似しているが、四次元的世界の描写にも共通性が見出せる。『過去の感覚』にてラルフが18世紀の過去へ遡る場面では、見慣れた「こちら側」の現在は「あちら側」の過去と、ドアを境に分岐されている。「懐かしの街角」の舞台となる家もドアの多さが強調され、なおかつドアは分身の居場所と密接に関わっている。「懐かしの家」での分身探索の場面では開いていた部屋のドアが閉まっており、ブライドンは閉じられたドアの背後＝「あちら側」に分身の存在を感じ、ドアが異質な空間への入り口となっている。加えて、この部屋は一番奥の4番目の部屋であり、なおかつ家の4階に位置することは単なる偶然ではない。ジェイムズは並行軸上／垂直軸上の4つ目の空間の接点に分身を位置づけ、その居場所を3次元とは異なる世界と関連付けている。

異界への入り口はドアだけでなく、「窓」にも該当することを、マーク・ブラックロック (Mark Blacklock) は「百万の窓」をもつ「小説の家」を引き合いに出しながら説明している。これは『ある婦人の肖像』(*The Portrait of a Lady*, 1881)の序文にて、ジェイムズが自らの小説技法を語る際に用いた建築的な比喩である。ジェイムズは「家」の無数の窓に、「比類のない道具」である双眼鏡をもった無数の人が立つ姿をイメージし (x-xi)、小説＝「家」の中の主人公の感情や行動をあらゆる角度の「窓」から観察することの必要性を述べた。ブラックロックはこの想像上の家の窓は高次の虚構に対する建築的な比喩であり、ドアと同様に、一つの空間から別の空間へと我々を案内する開口部であると述べている (185)。またピーター・ローリングス (Peter Rawlings) は、ジェイムズの「家」は「直線的かつ年代順的なモデルを攪乱する」と指摘し (140)、家を時間や空間の相対化をもたらす特権的トポスに位置づけた。ジェイムズにとって、窓やドアは異次元への入口、家あるいは部屋は現実と異なる空間という役割を担っているのである。

しかしながら、ジェイムズの「家」が物理的に主人公を過去へと遡らせることはない。むしろ彼の場合は、主人公の精神や意識によって時間が相対化されており、その相対化にはカール・ピアソン (Karl Pearson) の影響を見て取ることができよう。数理統計学者のピアソンは『科学の文法』(*The Grammar of Science*, 1892)にて、「空間と時間は現象の世界 (phenomenal world) の実在ではなく、われわれが物を知覚する方法 (modes) である」(229)と語っている。つまり、空間と時間の感覚は我々の外的世界ではなく、内的な感覚に依存することを指摘した。「懐かしの家」もブライドンの意識を反映させる場であり、彼の再訪は時間と空間を越えて自己を辿る精神的な意味での再訪なのである。ゆえにスレッシュはこの家を「一種の四次元的意識の場」(186)と表している。

5. 不可視化の世界を見通す光学装置

この四次元的世界の家にて、見えない世界を可視化する手段として光学装置が取り上げられて

いることは注目に値する。「懐かしの家」では、望遠鏡が分身を捉える可能性を示し、「小説の家」では、「双眼鏡」が比類なき装置として、人の眼と異なる視界の確保を約束している。ジェイムズは不可視の存在を可視化する手段として、光学装置を比喩的に用いているのである。それゆえに、「懐かしの家」の最後でブライドンと分身が対面した時に明らかとなる両者の眼鏡にも着目する必要がある。分身は双眼の鼻眼鏡を掛け、ブライドンは単眼の眼鏡を身につけているが、ジェーン・F・スライキル (Jane F. Thrailkill) は、象徴的に単眼と双眼の違いによって可視化できる世界の次元が異なり、単眼で不可視の世界が、双眼では可視化される視覚の非対称性を指摘している (248)。光学装置の違いによって、ブライドンと分身の世界の次元的な差異が浮き彫りにされているのである。

両者の対面が、懐かしの「家」の玄関ホールドアであることも象徴的である。四次元的世界でもある「家」の入口のドアは、現実世界と異なる世界の分岐点に位置する。ゆえにブライドンがこの「家」を出ること、つまり境界線の「あちら側」へ行くことは現実世界への脱出を意味すると同時に、分身との対面をテーマとする「小説の家」からの離脱を意味する。別の見方をすれば、この家からの離脱は分身との対峙を果たすことなく、パラレル・ワールドを持続させ、物語を「開いた」ままにする。しかし、恐怖のあまりブライドンは卒倒し、ジェイムズは分身をブライドンに接近させ、ここで二つの時間軸を生きた両者を接合させ、別々の過去を刻んできたパラレル・ワールドはワン・ワールドへと収斂される。しかも、最後にブライドンの幼馴染であるアリス・スタバートン (Alice Staverton) が彼を介抱し、相互の愛情の確認でもって、ジェイムズ流のサイエンス・フィクションは終了する。ジェイムズ作品に稀有な、この安易とも言える結末には、タイムトラベル物語を目指した『過去の感覚』の執筆中断という苦い経験が影響しているのであろう。

以上のように、19世紀末から20世紀初頭にかけての、4次元の存在や時間／空間の相対性を巡る思想をジェイムズは自らの文学的主題に織り込んでいった。しかし、ジェイムズの描く四次元世界は、超立方体のような明確な多次元的モデルを想定していない。むしろ彼の作品は現代と過去を、あるいは異なる空間を自らの意識の中で往還する、意識のタイムトラベルであり、パラレル・ワールドの物語である。言い換えれば、ジェイムズにとってのタイムトラベルやパラレル・ワールドは自身の意識を辿るための SF 的装置と言えよう。

引用文献

- Blacklock, Mark. *The Emergence of the Fourth Dimension: Higher Spatial Thinking in the Fin De Siècle*. Oxford UP, 2018.
- Frye, Northrop. *Northrop Frye's Late Notebooks, 1982-1990: Architecture of the Spiritual World*. U of Toronto P, 2000.
- James, Henry. "The Jolly Corner." *The Novels and Tales of Henry James*. Vol.17. Charles Scribner's Sons, 1937.
- . *The Portrait of a Lady. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.3. Augustus M. Kelley, 1976.
- . *The Sense of the Past. The Novels and Tales of Henry James*. Vol.26. Augustus M. Kelley, 1976.

- Pearson, Karl. *The Grammar of Science*. Charles Scribner's Sons, 1892.
- Rawlings, Peter. *Henry James and the Abuse of the Past*. Palgrave Macmillan, 2005.
- Richardson, Joan. *A Natural History of Pragmatism: The Fact of Feeling from Jonathan Edwards to Gertrude Stein*. Cambridge UP, 2006.
- Thraikill, Jane F. *Philosophical Siblings: Varieties of Playful Experience in Alice, William, and Henry James*. U of Pennsylvania P, 2022.
- Throesch, Elizabeth L. *Before Einstein: The Fourth Dimension in Fin-de-Siècle in Literature and Culture*. Anthem Press, 2017.
- Waters, Isobel. "‘Still and Still Moving’: The House as Time Machine in Henry James’s *The Sense of the Past*." *The Henry James Review*, vol.30, no.2, 2009, pp.180-95.

読み返すスティーヴン・クレイン ——ジャンル横断的な研究の試み

増 崎 恒

はじめに

19世紀末の米国では、大量の移民の受け入れと同時に諸外国との交流を通じて、国際化が急速に進む。その時代の雰囲気伝える国際的な祭典であるシカゴ万国博覧会（1893）が盛大に催され、米国は世界の耳目を集める。ところが、並行して花開く米国の自然主義文学が移民・貧困・都市の諸問題と紐付いて活発に議論される傍ら、万博は脇に追いやられる。

確かに、この時期に激増した移民が米国内で引き起こした（とされる）諸問題を軸に、決定論的哲学に照らして「米国自然主義文学」作家スティーヴン・クレイン（Stephen Crane, 1871-1900）は紋切り型に論じられてきた（Sorrentino, *Student Companion* 41）。¹ 決定論的な思想と彼の作風は合致するように思われる。（模範的な）米文学史の教科書は概して、米国自然主義文学の先駆者としてのポジションをクレインに与えた後で、それに続く（自然主義文学の系譜と目される）他の作家たちとの連続性の中にクレインを上手く当て嵌めて米国自然主義文学の枠組みを分かりやすく呈示してみせる。以下、筆者が目下構想しているクレイン研究の切り口を覚書的に記す。それを通して、旧来的な枠組みから脱却した、ジャンル横断的なクレイン研究と自然主義文学の読み返しを提案したい。

1. クレインと歪んだ時間

米文学における浦島物語の典型と言え、ワシントン・アーヴィング（Washington Irving, 1783-1859）の短編「リップ・ヴァン・ウィンクル」（“Rip Van Winkle”）を挙げることができる。主人公ウィンクルは、一晩眠るだけで20年もの時間を超越する。この設定について、亀井俊介は、「アメリカという国は、一夜にして二十年が過ぎるくらいに、あっという間に変わっていく国だったんですね」、とウィンクルと彼の同時代人が生きた米国社会の急激な変化をアーヴィングが的確に表現する名目で時間の速度を調節したと見る（亀井 112）。20世紀を目前に控えて期待と不安が入り交じる中、移民流入、万博開催、そして米西戦争（1898）勃発、とイベントが目白押しの1890年代の米国は同様の時間速度の歪みが生じる要件を満たしていた筈である。とすれば、クレインはウィンクルと同じ立場にあったと想像できる。

南北戦争（1861-65）を取り上げてクレインの出世作となった中編『赤い武勲章』（*The Red Badge of Courage*, 1895）の中で、野営地で一晩の眠りから目覚めた主人公フレミング（Fleming）は「千年間眠っていた」（asleep for a thousand years）と感じる（2: 80）。² クレインは戦後の生まれで南北戦争を一切経験していない。とすれば、作品の外の現実世界、つまり1890年代の米国

社会が直面している変化の速度がフレミングの眠りと彼が巻き込まれる戦場の混乱に委託されたと推察できる。

また、この時間の歪みはフレミングが「若い兵卒」(a youthful private)として作品に登場し、それ以後、「若者」(the youth)と地の文で表現され続けることと無関係ではない(2: 4, 5)。若さが強調されて、老いがそれと対をなす。両者に向けられる作家の興味を反映するかのようになり、『赤い武勲章』の翌年に発表された短編「退役軍人」(“The Veteran”, 1896)は『赤い武勲章』の中で触れられないフレミングの後日譚を補完的に取り上げる。「退役軍人」の中で、「老人」(the old man)としてフレミングは再登場する(6: 82-86)。老若のこの著しい落差は、作品の外を流れる1年という時間の歩みと乖離した、歪んだ時間の演出に一役買う。

この時代の米国では、時間の流れが人に作用した結果生じる老い、その対極に位置する若さ、の双方に対する関心が高まり、作品を跨ぐフレミングの描写にそれが投影されていると見るとき、そこに着眼することでクレイン(の作品)の再解釈の道が開けると期待される。

2. クレインの作品における老いと若さ

クレインが8歳のとき実父が病気で亡くなる。その死は彼の生活のみならず、父親が統括していた教会のコミュニティ全体に衝撃を与える。大黒柱を失い、一家は引越しを迫られる。なお悪いことに、一家の経済的負担を減らすため、クレインは「親類の家に預けられ」る羽目になる(Sorrentino, *Stephen Crane* 56)。これも相俟って、父親の死は幼少期の彼に少なからぬ影響を及ぼしたに相違ない。生活の急変も重なり、老いの先に待ち受ける死の意味を、父親の不在と結び付けて彼はこの時点で自覚し始めたと考えられる。

1896年、24歳のときに書かれた手紙の中で、“I am minded to die in my thirty-fifth year.”、と35歳での死を願う胸中を彼は吐露する(Wertheim and Sorrentino, *Correspondence* 180)。同年、「退役軍人」が発表される。手紙と作品の時期のこの一致は見過ごせない。

「退役軍人」の主人公フレミングは老人と表される一方、孫を持つ「偉大な祖父」(magnificent grandfather)でもある(6: 83)。1889年に米国で出版された人名辞典の中に、日本でもよく知られた童謡「大きな古時計」(“Grandfather’s Clock”, 1876)の作者が「ロンドンの病院で近頃亡くなった」(has just died in a London hospital)というデマ(実際のところ、「大きな古時計」の作者はそれ以前に米国で死去している)にまつわる記載が見られる(Cushing 276)。1890年代の米国で、祖父(の持ち物)を取り上げるこの童謡が色褪せず作者の死と紐付くある種の神話として機能していたことが示唆される。

クレインは1893年、『赤い武勲章』執筆の合間に、“The evenings were spent around the piano singing...”、とピアノの音色に合わせて歌唱して夕べを過ごしていた(Wertheim and Sorrentino, *Crane Log* 92)。とすれば、彼は「大きな古時計」に同時代の米国人と同様に馴れ親しんでいた可能性が高い。ここでは詳述を割愛するが、クレインの複数の作品で時計が小道具としてくり返し用いられ、且つそれが象徴する時間(の流れ)が登場人物たちによって頻繁に意識されることにも注意したい。この点でも、クレインと「大きな古時計」の間には接点が認められるかもしれない。

「大きな古時計」は語り手である孫の目線で祖父の生前の威光を語る。祖父は家父長制度の主役、且つ象徴として機能する。その死は、米国における同制度の衰退または存在意義の喪失を暗示する。それはクレインの父親の死と共鳴し、偉大な老人と評されるフレミングが燃え盛る馬小屋から仔馬を救出することに失敗するばかりか、そのまま火に巻かれて落命する「退役軍人」の、解釈の分かれる結末へと接続する。

家父長制度をめぐる米国社会の混乱を映し出すかのように、当時米国で刊行された礼儀作法本や医学書の中の記述、および英語学習書の例文は、“[Gray] hairs should be [respected].”、“Respect the old.”、“Nothing indicates good breeding so much as deference to the aged.”、と老人への敬意を奨励する一方、“There stood the poor old man.”、“The quantity of work done by the aged is greater than that done by the young; in quality the advantage is on the side of youth.”、とその境遇や仕事の質を根拠にして、若者よりも老人を下に見る (Beard 225; Conklin 111, 289; Houghton et al. 59)。関連して、英語学習書の中の練習問題の英文は、「よろめく」(totter) 老人を前面に押し出し、その運動能力の欠如、身体的な脆弱さを老いと結び付けて強調する (Conklin 128)。

これらの老人(的)な表象に倣うかのように、クレインの作品を横断して、運動能力の衰え、無力さが(暗)示される。1899年に書かれた短編「手枷足枷を嵌められて」(“Manacled”)に出てくる「男らしい」(manly)とわざわざ形容される主人公はこの観点から眺め返すに値する (8: 161)。彼は舞台役者で、囚人役を演じる都合上、「本物」(real)の「手枷」(handcuffs)と「足枷」(anklets)を嵌められている (8: 159)。劇場が突然火事になって彼は逃げ出すも、手枷足枷が邪魔で、一步ごとに「4インチの距離」(four inches long)しか移動できない (8: 160, 161)。男性性の際立つ、この若者が背負う象徴的、且つ実際的な縛り越しに、作家は老いがもたらす身体的な衰えのリアルを表現しようと試みていると解釈できよう。

また、火事を同様に取り上げる「退役軍人」とは異なり、「手枷足枷を嵌められて」の主人公の生死は最後まで曖昧なままである。むしろ、“Peace came to him again. There were charming effects amid the flames. . . . He felt very cool, delightfully cool. . . .”、と彼が到達する境地は付随する意味あり気な男性性と相俟って、老いと若さに付与される複線的な作家の意識を窺わせる (8: 162; ellipses in source)。それはまた、「大きな古時計」の発するメッセージに通じる、家父長制度に対する米国人のアンビバレントな意見表明として受け止められる。

作家のこの意識から遡り、それ以前の作品から老いと若さをめぐる表象を拾い上げて、それを再評価する作業は無価値ではない。作家が生きた1890年代の米国における老いと若さのせめぎ合い、それが持ち得た意味が立体的に浮かび上がると期待される。

3. 老いと若さの政治学

1890年の雑誌記事は、同時代の米国を「若い国家」(young nation)と言い表す (Lang et al. 592)。若さが米国を象徴する鍵文字として当時機能していたことに留意したい。1893年の万博は、旧世界の住人コロンブスによるアメリカ大陸発見から四百年の節目を記念して催される。旧世界に属する欧州が持つ伝統と古さは、新世界の中核をなす米国との間に老いと若さの象徴的な対立図を描く。他方、米国は欧州諸国との交流を経て自国の「文明の礎」(foundations of the

civilization) を築いた歴史を持つ (Davis 306)。米国の国際化と同時進行的に、新世界と旧世界をめぐる歴史認識の問題にまで発展する新旧・老若の関係性に光が当たり、米国人はそれを強く意識する。この19世紀末という稀有な一時代の産物として、クレイン (の作品) は万博と絡めて読み返され得る。

この老いと若さの政治学の文脈の中で、クレイン (の作品) は同時代の米国で出版された雑誌、礼儀作法本、医学書、辞典、学習書とジャンルを越えて連繋する。彼は28歳で夭逝したため、老境から若さを見つめることは叶わなかった。しかし、1896年の雑誌に掲載されたアルファベット案内は、“*S is for Stevie Crane, infant precocious.*”、と「早熟な子ども」(infant precocious) として彼を紹介する (Ziff 141; italic in source)。彼には精神的な老熟と身体的な若さが兼ね備わる。これを踏まえて、老いと若さの二軸を見遣る作家のまなざし、作品、およびその周辺を改めて突き合わせることで、1890年代の米国の諸相の掘り起こしが期待される。

おわりに

老いと若さに着眼した研究の切り口をクレイン (の作品) に適用するにあたって、『アメリカ文学における「老い」の政治学』(2012)、『ヘミングウェイと老い』(2013)、『ウィリアム・フォークナーと老いの表象』(2016)、と2010年代に入り矢継ぎ早に「高齢化が進む社会」を背景にして刊行された研究書に収録されている、米文学における老いの問題を突き詰める論考から思考のヒントを筆者は得た (金澤 12)。本研究ノートで綴られるクレイン研究の構想は、「老い」が「文学研究全般」に開く「新たな地平」を脱自然主義文学的なクレイン研究、とりわけ作家の「老いの戦略の可能性」を探求する試みに等しい (金澤 24-25)。

さて、2021年、クレインの伝記『燃える少年—スティーヴン・クレインの生涯と作品』(*Burning Boy: The Life and Works of Stephen Crane*) をポール・オースター (Paul Auster) は上梓する。表題の中の「少年」(boy) はクレインの若さを強調する。また、“One hundred and twenty years after his death, Stephen Crane continues to burn.”、と今日にまで至るクレインの影響をオースターは「燃え続け」る炎になぞらえる (Auster 3)。死後なお若いエネルギーを発し続けるクレインと不思議と古さを感じさせない彼の作品を研究することは今、想像以上にアツい。

注

1. クレインの単行本第一作『街の女マギー』(*Maggie: A Girl of the Streets*) は万博が開催された年に出版されている。この事実を踏まえれば、万博とクレイン (の作品) の間に連続性が無いとは言いきれない。
2. クレインの作品の引用はフレッドソン・パワーズ (Fredson Bowers) が編纂したヴァージニア大学版の全集から行い、括弧内に巻数と頁数を記す。

引用文献

- Auster, Paul. *Burning Boy: The Life and Works of Stephen Crane*. Henry Holt, 2021.
- Beard, George M. *American Nervousness: Its Causes and Consequences*. Putnam's, 1881.
- Bowers, Fredson, editor. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. UP of Virginia, 1969-76. 10 vols.
- Conklin, Benjamin Y. *A Complete Graded Course in English Grammar and Composition*. Appleton, 1888.
- Cushing, William. *Anonyms: A Dictionary of Revealed Authorship*. Cushing, 1889.
- Davis, George R. "The World's Columbian Exposition." *North American Review*, vol.154, 1892, pp. 305-18.
- Houghton, Walter R., et al. *Rules of Etiquette and Home Culture; Or, What to Do and How to do It*. 25th ed., Rand-McNally, 1893.
- Lang, Andrew, et al. "The Typical American." *North American Review*, vol.150, 1890, pp. 586-93.
- Sorrentino, Paul. *Stephen Crane: A Life of Fire*. Belknap, 2014.
- . *Student Companion to Stephen Crane*. Greenwood, 2006.
- Wertheim, Stanley and Paul Sorrentino, editors. *The Correspondence of Stephen Crane*. Columbia UP, 1988. 2 vols.
- . *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. G. K. Hall, 1994.
- Ziff, Larzer. *The American 1890s: Life and Times of a Lost Generation*. Viking, 1966.
- 金澤哲編『アメリカ文学における「老い」の政治学』松籟社、2012。
- 亀井俊介『アメリカ文学史講義 1——新世界の夢——植民地時代から南北戦争まで』南雲堂、1997。

相田洋明 編著

『ウィリアム・フォークナーの日本訪問——冷戦と文学のポリティクス』

(松籟社, 2022年11月、233頁)

重 迫 和 美

「はじめに」で編著者の相田洋明が述べるように、本書は1955年のウィリアム・フォークナー(William Faulkner)日本訪問を「敗戦後一〇年、講和後三年の日本文化の状況のなかに位置づけ、フォークナー訪日が戦後日本に与えた影響をはかるとともに、この訪問が作家の晩年のキャリアにおいてどのような意味をもちえたのかを探るもの」である(9-10)。作品研究中心のこれまでの日本のフォークナー研究に欠けていた「文化政治の領域からの視点」(13)を加えることで、本書はフォークナー研究のみならず、日本の文学研究のあり方を問う研究にもなっている。

第1部「フォークナー訪日の実際」は4章から成る。相田による第1章「日本におけるフォークナーの足跡と『長野でのフォークナー』」は、前半でフォークナー訪日の足取りを丁寧にたどり、彼の行動一つ一つがアメリカの国策・国益に沿ったものであった事実を暴く。後半ではフォークナー訪日の産物『長野でのフォークナー』(*Faulkner at Nagano*, 1956)を取り上げ、まず『庭のライオン』(*Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962*, 1968)に再録された内容と比較してフォークナー訪日という政治的イベントが文学的テキストへと変貌した様を明らかにする。次に『長野でのフォークナー』は、「日本の若者たちへ」がアメリカ南部と日本(南北戦争/太平洋戦争に対する)戦争敗者という類似点を設定して相互理解を促している一方で、人種問題に関する日本人質問者とフォークナーとのやりとりなど相互理解の難しさを露呈するテキストも収録されていると論じ、同書の研究上の価値を指摘している。

第2章「フォークナー訪日と高見順——届かなかった手紙」で梅垣昌子が焦点をあてるのは来日前のフォークナーに手紙を送り、来日時2回にわたって彼と話をした高見順である。まず梅垣は、高見がフォークナーを政治的に利用しようとして失敗したと論じる。フォークナー来日前年の1954年、岩波書店の雑誌『世界』の企画として、高見はフォークナーに手紙を送ったことがある。その手紙には水爆実験への抗議にフォークナーの賛同を得ようとする政治的意図があったがフォークナーから返信はなく、高見の目論みは失敗してしまった。次に梅垣は、来日時のフォークナーと高見の対談に前年の高見の手紙に対するフォークナーの返答を読み込む。高見の手紙は日本文学の方向性を問うて締めくくられていた。対談の終わりに高見は文学の社会性と芸術性についてフォークナーに意見を問うことで、「ヒューマニストの方向性、あるいは社会派的な方向性」(59)に日本文学も含めた現代文学が向かうというフォークナーの答えを引き出したのである。最後に梅垣はフォークナーと高見がバルザック(Balzac)という「文学遺伝子」(60)を共有していたと論じて章を閉じる。

山本裕子による第3章「映画になったフォークナー——『日本の印象』とUSIS」はフォーク

ナー来日を描いた米国広報庁・米国大使館文化交換局 (United States Information Agency, USIA; United States Information Service, USIS) 制作ドキュメンタリー映画『日本の印象』(*Impressions of Japan: William Faulkner*) が USIS 映画として果たした政治的役割を、遠景、中景、近影の3つの背景から論じる。遠景は冷戦期 USIA が世界的に展開した諸外国親米化のメディア活動であり、中景は日本における原子力平和利用運動と文化外交、近影は『日本の印象』編集現場である。これらの背景から『日本の印象』を検討すると、USIS 映画としての本映画がアメリカ的価値観を啓蒙する視聴覚教材の役割を担っていたこと、人々に親米化を働きかけ原子力支持の政治運動を補完する役割を持っていたこと、フォークナー自身が「アメリカを代表する文化親善大使による日本での宣教」(86) 役を理解して演じ切ったことが明らかになる。

第4章「その広大な紙面にて——ウィリアム・フォークナーと文化冷戦の言語アリーナ」で山根亮一は1955年にフォークナーを囲んで行われた「長野セミナー」参加者の寄せ書きを、その中の東山正芳の奇異なメッセージ ($E=mc^2$) に注意を喚起しつつ、アメリカ文化冷戦という言葉アリーナの一場面として読み解いていく。山根はアメリカ文化冷戦の反全体主義的言語アリーナの基盤を「広大な紙面」(102) と呼び、そこに二つのことが起きていたと指摘する。一つは例外主義的アメリカ南部という地域表象の政治的拡張、即ちアメリカ国内の南北対立と米ソを中心とする国際的な東西対立という二つの政治闘争のメタフォリカルな運動である。もう一つは私的空間の政治的拡張である。例えば『エンカウンター』(*Encounter*) のような反全体主義を掲げる出版物に掲載された文章は、日記などの個人の内面の表現であっても書き手本人の意図と関わりなく反全体主義的表現とみなされてしまう。そう考えれば、長野セミナーの寄せ書きは「当時の日米文化を跨ぐ反全体主義的コンセンサスの縮図」(114) と見えるし、また東山のメッセージは「広大な紙面」の包摂力に意識的であれという警告として我々に響くのである。

第2部「フォークナー訪日と同時代の日本文化」は森有礼の第5章「太平洋戦争の記憶、『ゴジラ』、そしてフォークナー訪日の意義」から始まる。森はまず、『日本の印象』と「日本の若者たちへ」が日本人に「敗戦の記憶を超克し、将来への展望と失われた国家の誇りを恢復する契機」(129) を与えたと解釈する。森によれば、戦後日本の若い世代は「敗戦に纏わる国家的な恥辱の記憶」の再解釈を必要としていた。その根拠として森が参照するのが特撮映画『ゴジラ』である。森はスーザン・ネイピア (Suzan Napier) とマーク・アンダーソン (Mark Anderson) の『ゴジラ』論を引いて、『ゴジラ』は敗戦のトラウマの新たな表象形態であり、「日本人の国民的憂鬱症」に対する「文化療法」、「喪の行為」の意味を持ったと述べる (134)。森によると、この「国民的憂鬱症」に対して『ゴジラ』よりも有効に働いたのがフォークナーの「日本の若者たちへ」である。それは敗戦のトラウマの「文化療法」として、敗戦の原因 (アメリカによる破壊と天皇制の存在) を抑圧した上で、日本が西側の自由民主主義に組み込まれていく未来を日本の文化的復興の物語として心地よく示しているからである。

第6章「フォークナー来日と日本におけるアメリカ文学の制度化」で、越智博美はフォークナー来日を日本におけるアメリカ文学研究の制度化の一コマとして論じる。戦後日本におけるアメリカ文学研究は、冷戦期アメリカの文学コンセンサス形成に強く影響されて制度化された。スタンフォード大学=東京大学アメリカ研究セミナーとフォークナー来日を含む「長野セミナー」の内容、「日本アメリカ文学会」創設の経緯と日本人アメリカ文学研究者たちによって翻訳され

たアメリカ文学作品や研究書、及び彼らが執筆したアメリカ文学教科書など、日本におけるアメリカ文学研究の制度化に関わる事象を緻密に分析し、アメリカ文学の冷戦コンセンサスが日本を巻き込んで形成されていく様を越智は顕にしている。さらに越智はアメリカ南部のモダニズム作家がこの時期にアメリカ文学研究のキャンノンに位置付けられたことに注目する。1953年来日の南部史研究者C・ヴァン・ウッドワード (C. Vann Woodward) による「南部の敗北こそ逆接的に普遍的である」(156) という主張を踏まえて「日本の若者たちへ」を読むと、フォークナーが敗北を媒介に日本とアメリカ南部を普遍性へと結びつける役割を担ったこと、それが占領政策に沿った文化政策の一連の動きの仕上げだったと理解できるのである。

第3部「訪日とフォークナー文学」には二つの論考が収められている。第7章「冷戦戦士のもう一つの顔——『寓話』と『館』にみる南部的想像力」で、松原陽子は『寓話』(*A Fable*, 1954)と『館』(*The Mansion*, 1959)に冷戦戦士とは異なるフォークナーの顔を見る。フォークナー訪日前に出版された『寓話』は冷戦期アメリカの自由主義イデオロギーと共振していると評されている。しかし、松原は、作中で戦闘放棄に失敗し自国の砲撃により負傷した「伝令兵」が国家に裏切られた個人と言えることから、フォークナーが自国の支配的価値観に懐疑的であったと解釈する。松原によれば、フォークナー訪日後に執筆・出版された『館』ではアメリカの反共戦略に対する彼の批判的認識が顕在化する。例えば、ミンク・スノープス (Mink Snopes) によるフレム・スノープス (Flem Snopes) への復讐の動機は私怨による個人主義的なものから小作人という身分から生じる階級闘争の類似物へと変化しており、共産主義に対して個人主義の価値観を掲げるアメリカの反共戦略に逆行している。両作品を貫く自国の価値観に批判的なフォークナーの眼差しを、松原は「南部的想像力」が可能にしていると論じる。

本書の最終章は金澤哲による「教育の可能性——長野セミナーと『町』」である。フォークナー訪日後に書かれた『町』(*The Town*, 1957)を訪日前の『墓地への侵入者』(*Intruder in the Dust*, 1948)と比較して、金澤は冷戦と日本(長野)訪問がフォークナー作品に与えた影響を探る。『墓地への侵入者』はギャヴィン・スティーヴンズ (Gavin Stevens) のチック・マリソン (Chick [Charles] Mallison) に対する南部人としての同質性を促す教育が主題であり、世界=ヨクナパトーフア (Yoknapatawpha) を北部対南部の構図で見る「冷戦以前の枠組み」(198)で描かれている。対する『町』ではヨクナパトーフアの同質性は脅威に晒されている。ギャヴィンは、冷戦戦士のごとく、フレム・スノープスが代表する「スノープス主義」とその妻ユーラ (Eula) のセクシュアリティを「封じ込め」(202)、「教育」(209)によってユーラの娘リнда (Linda) をスノープス主義から解放しようとする。さらに、金澤はリндаの教育のエピソードなどが醸す作品全体の楽観性をフォークナーの長野での充実した教育体験の影響だと論じていく。冷戦を背景にフォークナーが日本・長野で体験したことを『町』は反映しているのである。

「あとがき」によると、本書の構想は2014年夏に遡る。出版経緯の詳細は「あとがき」に譲るが、結果として長い年月をかけた堅実な研究が本書に結実することとなった。論客の個性溢れる各章は単独でも十分に研究上の価値がある。各章の注も読み飛ばさないうで欲しい。書誌情報として有益なだけでなく、注自体が興味深く読めるからである。しかし、何より本書が秀逸なのは全体の構成だと言えよう。いったん本書を手にとられたら、ぜひ通読していただきたい。「文化政治の領域からの視点」で各章が描き出す新しいフォークナー像は、全体を通して見ると、ノー

書 評

ベル文学賞受賞の世界的文士を冷戦戦士として利用しようとする国家の思惑に乗って理想の戦士を意識的に演じた彼と、にもかかわらず、あるいはだからこそ、自らの演技と国家戦略に批判的な視点を作中に持ち続けた彼とが照射し合う、複雑でしたたかな像と見えてくるだろう。ここでもこだまするかのように響く「 $E=mc^2$ 」の警告を我々文学研究者は忘れるべきではない。

辻 祥 子

真田満・倉橋洋子・小田敦子・伊藤淑子 編著

『19世紀アメリカ作家たちとエコノミー——国家・家庭・親密な圏域』

(彩流社、2023年2月、272頁)

辻 祥 子

タイトルにある「エコノミー」という言葉は実に多義的で、本書の各論考もその言葉の様々な意味に注目しているが、ここでは2つに絞りたい。「まえがき」でも触れられているように、“economy”は、元来、家庭内の衣食住に関わるやり繰り、すなわち家庭経営（家政）を意味する言葉であった。近代になって国民国家が誕生すると、国民のエコノミーは国家の問題となり、「国の経済」という意味が加わる。アメリカの場合、19世紀に入って資本主義の経済体制が確立し、利益至上主義の性質を強めていく。文学を含む芸術活動は冷遇され、作家は経済的困難を強いられる。当時のアメリカ人作家は、家庭経営と国の経済という二つのレベルのエコノミーをどのように捉えていたのか。本書は、このテーマを初めて本格的に論じた批評書と言える。目次を見ると、第Ⅰ部「南北戦争前／経済編」、第Ⅱ部「南北戦争前／家庭経営編」、第Ⅲ部「南北戦争後」の3部構成となっているが、それとは別に、論考で取り上げられた作家は4つのタイプに分類できる。1. 経済的困難の中、自分の理想とする創作活動を続けた作家、2. 資本主義体制に対する批判を作品にこめた作家、3. 資本主義体制を逆手に取って、自らの解放を実現した作家、4. エコノミーの原点としての家政に関心を向けた作家である。各論考を簡単に紹介しながら、作家のタイプごとにその特徴をみていきたい。

1. 経済的困難の中の創作活動

倉橋洋子「ホーソンの『不滅の名声の夢』追求と経済的困窮との闘い——ホレイショ・ブリッジの友情と援助」：念願かなって作家になったホーソンは、親戚や親友ブリッジからその都度経済的援助を受けるものの、高額な出版費用がかさみ、たえず貧困状態にあった。また「利益を優先する出版社に振り回され、絶望と怒り」を覚えることもあった（47）。倉橋氏の論考は、ホーソンの作家活動の舞台裏の金銭をめぐる生々しいエピソードを克明にあぶりだしている。一方で彼は、後世に残る作品を書いて作家としての「不滅の名声」を得ることに、最後までこだわり続けた。

西谷拓哉「『煙突』の構造——メルヴィルにみる家計と創作のディレンマ」：短編「私と私の煙突」は期待していた『白鯨』の売れ行きが振るわず、メルヴィルが精神的にも経済的にもかなり追い込まれていた時期の作品である。家の中の無用の長物として撤去されそうになっている煙突に、メルヴィルが貧しく、存在意義も危うい作家である自分自身を重ねていると読める。しかし西谷氏は、実際はもっと複雑であるとし、メルヴィルが当時流行していた家庭小説に対抗し、あ

えて謎を残す手法を取っていることに注目する。そして語り手が、「エイハブやピエールのように謎を追究する側ではなく、むしろ謎を守り、謎と一体化しようとする人物」として描かれていることを指摘する（192）。つまり、この短編は、「自らの小説美学を守り抜こうとする」メルヴィルの挑戦的な作品であり（193）、経済的困窮にあっても、メルヴィルの創作意欲はなお健在であったと言える。

伊藤淑子「マーガレット・フラーのイタリアにおける経済的困難と「真実」探究——『レイラ』からイタリアの革命へ」：フラーは、雑誌の特派員として革命ただ中のイタリアに渡るが、経済力のない元貴族の兵士と恋に落ち、彼との子を出産する。その後、諸事情で帰国を決意するも、その手段に運賃の安い貨物船を選んだことで海難事故に巻き込まれ、命を落とす。フラーの人生には常に経済的困難が付きまとうが、伊藤氏は、彼女が民主主義や男女の平等について、あくまで自分の理想を追求し、著作を続けたことを評価している。

里内克己「我が風狂の兄——トウェインが描いたオーリオン・クレメンズ」：トウェインが作家として成功し順風満帆な人生を歩んでいたとき、十歳年上の兄オーリオンは失業して家族を自力で養えず、弟の仕送りを頼りにしていたという。そういった兄に対する優越感からか、トウェインの作品に登場する兄らしき人物はどれも影が薄く、兄の欠点である移り気な性格が投影されている。しかし里内氏は、トウェインがみずから深刻な経済的窮地に陥った晩年に書いた未完の作『それはどっちだったか』に注目する。この作品では、兄のモデルとおぼしき邪悪な男ソルが、悩めるトウェインの分身ジョージを救いへと導く可能性のあることが示唆されている。つまり、経済的困窮がトウェインを作家として新たな境地に立たせたとも言える。

2. 資本主義批判

高橋勤「『ウォールデン』における冬の経済——ソローと暮らしのエコノミー」：高橋氏によると、ソローは『ウォールデン』の中で、個人の生計とそれに影響を与えている資本主義社会の両方のエコノミーに目を向け、その不合理・不経済を指摘している。たとえば19世紀のニューイングランドでは、人々が大きな家を建て、幾つもの部屋を作って暖炉を置き、薪を浪費する。また客人は、パーラーという独立した部屋に通され、主人と心の通わない軽薄なおしゃべりをする。ソローはこういったミドルクラスの生活や文化の浅薄さの背景に、市場経済による社会経済システムや資本主義による労働の分業を挙げ、危機感を強めている。

池末陽子「成功者への道——ポーの『実業家』にみるウォール・ストリート風のビジネス手法」：ポーは、19世紀半ばのアメリカを舞台にした短編「実業家」で、詐欺まがいのビジネスを次々手掛けては大儲けをするプロフィットという人物を通して、当時の資本主義社会を皮肉っている。池末氏の詳細な分析の一部を紹介すると、プロフィットは秩序にこだわり、『『正確性』と『几帳面さ』が要となる取引日記や会計元帳』を大切にしているが、それは、市場の仕組みの構築や産業の合理化が進み、人間関係が債務債権関係に縛られていく現状を表している（65）。またプロフィットがオルガン弾きで儲けた話は、ウォール・ストリートでごく普通の人々が市場取引に巻き込まれていくことを象徴している。この作品の随所に、資本主義経済に対するポーの不信感が読み取れる。

真田満「メルヴィルの家計／家庭の問題とフランクリン批判」：メルヴィル後期中編「イスラエル・ポッター」には、節約と勤勉を実践し、アメリカ資本主義社会の立身出世の手本と見なされた起業家ベンジャミン・フランクリンが登場し、語り手に揶揄される。フランクリンは、国家と家庭という二つの世界のエコノミーにおいて、キリスト教の教えとブルジョア階級の新しい経済倫理のバランスをうまく取りながら成功する。公私ともに失敗続きのメルヴィルにすれば面白くない。また、国家や家庭の秩序を整え統制を行うことを是とするフランクリンの考えは、自由な創作活動を求めるメルヴィルの価値観と相容れないと真田氏は解釈する。

生田和也「経済の呪い——ホーソンの『七破風の屋敷』における親密圏の形成」：資本主義は経済の巨大なシステムの中で、金品だけでなく感情までも交換・流通させる。その力を恐れつつ、経済活動に関与せざるを得ない作家ホーソンは、自らの境遇を『七破風の屋敷』の登場人物たちに投影する。生田氏は、押し寄せる資本主義の波に勝てず、疎外された彼らの心を、ホーソンが物語の終盤で救済しようとしていると指摘する。彼らは「家族」や「家庭」に代わる「共感と気配りのネットワーク」、すなわち「親密圏」を構築し（153）、その中で感情を循環させようとしているのである。

3. 資本主義体制を逆手にとって、著作を出版、自らを解放

野口啓子「北部出身の元奴隷ソジャーナ・トゥルース——自らを広告する黒人女性」：野口氏は、文盲の元奴隷トゥルースと経済の関わりを明らかにしている。トゥルースは、1830年代後半の経済恐慌で資本主義の脆さを目の当たりにし、資本主義が生み出す格差社会が巨大な略奪と不正のシステムを作り出していることにも気付いている。しかしながら、彼女はのちに自分の『自伝』と写真をセットにして売り出す。そしてその儲けによって、自立を果たし、女性解放のための活動資金も確保する。つまり彼女は、資本主義を利用することで、自らを解放したと言える。

中村善雄「親密圏のジェイムズとボサンケット——タイプライターのエコノミーと書くことへの欲望」：中村氏はジェイムズが雇ったボサンケットという女性タイピストに注目する。19世紀後半のタイプライターの発明は、執筆行為という労働のエコノミー、即ち効率化を実現したが、機械を操作するタイピストたちは主人に低賃金で雇われ、感情を持たぬ奴隷／機械として働かされていた。一方で、指を器用に動かすタイピストの仕事は女性向きと考えられ、女性が優先的に雇用された。つまりボサンケットは女性であるがゆえに大作家のすぐ傍（＝親密圏）で仕事をする機会を得たのであり、ジェイムズの死後は、彼の創作の第一目撃者として雑誌や書籍の中で、自ら語りだす。彼女は、資本主義がもたらした逆境を逆手にとって、主体性と表現の自由を手に入れることができたと言える。

4. 家政に関心を向けた作家

城戸光世「家政学の誕生と家庭性神話の再考——チャイルド、ビーチャー、ストウ」：城戸氏は、3人の女性作家が共通して家政の重要性を説きながら、従来のドメスティック・イデオロ

ギーからさらに一歩進んだ考えを持っている点を評価している。チャイルドは家政手引書を複数出版して有名になるが、それは家庭性を手放しで礼賛するものではなく、勤労の倫理や節約精神を女性に学ばせるものであった。ビーチャーとストウはともに、家政は国政の根幹となるもので、健やかな家庭経営こそが、分断された社会を癒し、苦難を乗り越える道徳的力を与えると主張する。3人の女性作家が目指した究極の目標は、家庭経営を担う女性の地位の向上や教育の推進であった。

小田敦子「エマソン経済圏としてのコンコード」：若くして自ら家庭を切り盛りする能力に秀でていたエマソンは、家庭経営に対処できてこそ一人前であると語り、のちに活動の範囲を近隣社会にまで広げていく。彼にとって、家は「人間の精神を培う場」であり(30)、かならずしもその構成員は家族とは限らない。彼は自然豊かなコンコードに住む価値観の似通った友人たちを集め、知的刺激を与え合う「エマソン経済圏」なるものを形成するのである。エマソンは、その中で農業経営を通して自然と一体化することで、「自然と愛の宗教」の可能性を見出す(38)。すなわちエマソン経済圏の形成は、「文学者エマソンにとっての社会改革運動、ジェファソンの農業を主体とした独立自営思想の現代版であり、文学活動であった」と小田氏は論じるが(24)、その出発点になっているのが家政であった。

竹井智子「小説執筆という労働——ヘンリー・ジェームズ「ブラックスマス」と一貫性の呪縛」：ジェームズはイギリスの階級社会を舞台にした短編で、上流階級に仕える男性執事を家政の担い手として描く。執事は、主人が家で開く社交パーティで、来賓たちの人間関係が円滑にいくように影で仕切っている。竹井氏はそのようにして「家を総べる」執事と、物語を統括する語り手の間に比喩的類似性、さらには執事と作者自身との間に比喩を超えた関係性を見いだしている。ジェームズは作家として社交界の人々の自由な振る舞いを取材し、そのエピソードを繋ぎ合わせ、一貫性のあるものに作り上げている。一貫性から自由になれるのが上流階級で、束縛されるのがその下の身分の執事であり作家である。ここでは家政の意味が家の統括から小説の統括にまで広げられている。

ここまで、エコノミーの定義の中で、国の経済と家政に注目し、それらに対する作家のスタンスを本書がどのように論じているかを概観してきた。紙面は尽きたが、本書の魅力はまだ紹介しきれしていない。エコノミーが持つ統括、制御、循環、代謝といった多様な意味とイメージをそれぞれの作家が巧みに使いこなしていることも各論考は明らかにしている。また「親密圏」の意味も作家によって違って興味深い。いずれにしても本書は、エコノミーをキーワードに、文学批評の新たな境地を切り開いた屈指の良書と言える。

伊藤詔子・中野博文・肥後本芳男 編著

『アメリカ研究の現在地——危機と再生』

(彩流社、2023年2月、363頁)

真 野 剛

当書は中四国アメリカ学会創立五十周年を記念して上梓されたものである。1973年に設立したこの学会は、中国地方を中心として歴史、政治、地理、経済、文化、そして文学といった各分野の専門家らの鋭意努力によって支えられてきた。当書は序章の他に17の章と9つのコラムをジャンル分けする形で構成されている。アメリカ文学の専門的知見を有する本学会会員14名も執筆者として名を連ねており、ここでは本学会会員の書かれたものを概観する形で紹介したい。

【第I部：アメリカ研究の原点と現在】は、アメリカ研究の起点から今日にいたるまでの研究課題を論じたものである。辻祥子氏の「一九世紀アメリカ文学における先住民・黒人の復讐劇——ポー、ホーソー、メルヴィルのゴシック世界」は、白人の対先住民政策がもたらした悲劇を、表題の19世紀を代表する3名の白人男性作家に共通する関心事であったと捉え、「先住民の亡霊、あるいは生き残りが白人に仕掛ける復讐というゴシック的テーマ」(69)がそれぞれの作品にみられることに着目する。アメリカが発展を遂げてきた過程で虐げられた者たちの悲しみや怒りを封じ込めた側面を見つめて作品の中で表現することは、3名の白人男性作家に共通するテーマであったと語る。彼らの作品を読み直すことは、今なおも人種差別主義から脱却できずにいるアメリカに対して警告を鳴らすことになるのだと結論づける(73)。

【第II部：「アメリカの世紀」の誕生と衰退】では、アメリカという巨大国家を多面的に考察し、これまでの推移をもとに論じたものである。城戸光世氏の「使用されうる過去——二〇世紀のアメリカン・ルネサンス再考」は、アメリカ文学がアメリカン・ルネサンスの到来とともに知的独立を成し遂げた歴史をあらためて見つめなおし、「アメリカン・ルネサンス」の定義への批判や再検討の流れを精査しつつ、「アメリカン・ルネサンス」あるいは「ルネサンス」という用語や概念が時代や文化とともにどのように解釈されきたのかを探る。その上で、「アメリカン・ルネサンス」という用語の求心力が現代においても色濃く残っていることを指摘するとともに、アメリカ研究に携わる我々を過去から未来へと結びつけるものであると語る(115-16)。森瑞樹氏のコラム「スティーブン・ソンドハイム——『アメリカの世紀』を作ったアーティストの眼差し」では、ブロードウェイ・ミュージカルの黄金期を支えた巨匠を取り上げる。作曲家リチャード・ローズと作詞兼脚本家のオスカー・ハマースタイン二世のよる歌や踊りといった要素を巧みに取り入れ、全てが物語り伝達の役割を果たす「統合されたミュージカル」(157)と、ハマースタインの影響を受けたスティーブン・ソンドハイムによる特定のテーマを中心とする「コンセプト・ミュージカル」が現代のブロードウェイに受け継がれていることを提示する(158)。

【第III部：トランスナショナルな核の遺産——文学、思想、環境】は、アメリカの核技術が世

界にもたらした影響とそれに巻き込まれた人々の姿を追った論文が寄せられている。マイケル・ゴーマン氏の「重なる風景、移植される悲劇——ナオミ・ヒラハラのマス・アライ・ミステリー・シリーズにおけるトラウマと帰属」では、核兵器による広島、長崎の人的被害を隠蔽してきたアメリカ社会に異を唱えるナオミ・ヒラハラの作品を取り上げる。ヒラハラの作品では、トラウマや癒し、あるいは原爆による PTSD に対処するものとして造園を全景化する (169)。庭師の主人公マス・アライの原爆による心理的損傷や日系人であるがゆえの帰属への劣等感、家族の存在を通してマス自身の心に変化をもたせると語る。松永京子氏の「核廃棄物をめぐる (不) 可視性とドキュメンタリー映画——『コンテインメント』と『ナバホ・ボーイの帰還』」は、北米のメディアによって美化、あるいはサブライムに置き換えられてきた〈核〉のイメージを核の不可視化から考察する。取り上げる『コンテインメント』(2015) と『ナバホ・ボーイの帰還』(2000) という二つのドキュメンタリー映像は、「長い時間をかけて経験されてきた核廃棄物の諸問題を可視化する」(211) ものであり、ドキュメンタリーゆえの強みがある。松永氏の言葉、「(二つの) ドキュメンタリーが何を (不) 可視化し、補完しあっているのかを考えることは、核廃棄物の問題を多角的視点からとらえ、核廃棄物を可能にしてきた私たちの生き方や社会のあり方を問い直すきっかけを与えてくれる」(211) は、核使用の是非ばかりにとらわれている多くの人々に対して、視点を広げ、逐次的に核問題を考えることを訴える。岸野英美氏のコラム「ネバダ核実験場と文学」では、2008 年に出版された *Literary Nevada* (Cheryll Glotfelty 編) の中でテリー・テンペスト・ウィリアムスが取り上げた二編の詩を紹介する。核実験によってもたらされる闇や土地に生きる者たちからの搾取はウィリアムスが語った広島の歴史に通底するものがある。こうした負の歴史に目を向け、そこから学び、暴力に抗うことの重要性を伝えており、それは二一世紀を生きる我々に託された課題であると述べる (220)。

【第IV部：ボーダーランズからアメリカを問う】は、領土を拡大してきたことによる他文化との交わる境 域^{ボーダーランズ}を中心に論じる。塩田弘氏の「『西部文学』から『エコトピア国の出現』へ——伝統と変革の『西部』」は、SF 小説を手掛けてきたアーネスト・カレンバックが描いた架空の都市「エコトピア」を舞台に繰り広げられる二つの作品を、西部史観および西部文学の変遷を追いながら論じる。塩田氏は、カレンバックの生態地域主義への目覚めを指摘する。カレンバックの生態地域主義への目覚めは、ソローを代表する生態地域主義の原点ボーダーランズとしての西部文学へ辿り着いたものともいえ、自然をそのままに受け入れて、次世代へ引き継ごうという意図の作品として読むことも可能であると語る (255)。渡邊真理香氏の「ルヴォワル『スチューデント・オブ・ヒストリー』に描かれる境界の諸相——階級、人種、ジェンダー」は、日本人の母とアメリカ人の父を持つルヴォワルが2019年に執筆した6作目となる長編小説を取り扱う。渡邊氏によると、この小説はこれまであまり触れてこなかった階級の問題について、ルヴォワルの意識が色濃く反映された作品である (260)。著者と同一ような人種的背景を持つ主人公リックは、「境界のあわいを象徴する人物」(262)であり、彼の視点や周縁の人々の存在を通して、ロサンゼルス社会に蔓延する人種、階級、そしてジェンダーの境界線が浮き彫りにされる。ただし、流動的な存在であるがゆえに境界を超える可能性が示唆されるリックでありながらも、その境界線は決して簡単に消えるものではなく、ルヴォワルはこの作品を通じて「境界を越えた人々の連帯を示唆しつつも、同時にアメリカ社会が未ださまざまな線引きでそれを阻んでいることを訴えて

いる」(272-73)のだと渡邊氏は語る。本岡亜沙子氏の「意識化される境界線——オルコット『若草物語』の翻案より」は、オルコットによる『若草物語』が、国境を越えた映画化の到来として日本国内での受容に関して考察する。日中戦争や女性教育といった時代背景と相まってさまざまな改作や翻案がなされてきたこの作品は、翻案に新たな解釈が加えられることで原作の中身は失われ、「こうしたオリジナルの矮小化は、批評家や翻案者による誤情報でさらに増幅してゆく」(284)のだと本岡氏は語る。同氏は、オリジナルの後景化と同時にまったく異なる『若草物語』が前景化されているとした上で、こうした翻案による歴史により、国境というボーダーは消し去られるどころか、むしろまだ見ぬ境界線を現代に生きる我々に提示してくれるのだと指摘する(286)。水野敦子氏のコラム「米墨国境地帯の文化とトランプ政権」では、米墨戦争によって生まれたメキシコ系アメリカ人と彼らのアイデンティティを求めたチカーノ運動を語る。チカーノ(+)文学の作家について言及するとともに、米墨国境地帯がシルコーやマッカーシーといったチカーノ(+)以外の作家にとっても創作活動の場となっており、「アメリカスの多声的な時空間と、砂漠と豊かな植生が混在する自然があり、それらがこの地に生きる人々に創造的インスピレーションを与え、トランスナショナルな文化を育ててきた」(292)のだと述べる。

【第V部：ポスト・グローバル世界と超域アメリカ研究】は、人種運動や環境運動を考察し、国境を越えた共同体の存在に着目する。田中久男氏の「南部連合にまつわる記念碑をめぐる問題——空間と景観の公平化に向けて」では、南北戦争の争点であった奴隷制度について、BLM運動をきっかけにパラダイムシフトを経た現在の価値観から、南北戦争時代の記念碑の在り方を論じる。南北戦争において南部の人々が抱いた「失われた大義」というイデオロギーは、「自己の尊厳を守ろうとする、フロイト心理学で言う『防衛機制の表れ』」(300)であった。南部連合に纏わるシンボルは「永続的な教化装置」(308)として公共の場を支配する。田中氏は白人優位主義を標榜する人々によって水面下で与えられる影響に対し、空間と景観の公平化を目指すため歴史的認識とともに記念碑の在り方を再考する試みを分析する。伊藤詔子氏の「環境作家たちの『市民の不服従』——エコソーシャル・ヴィジョンの継承をめぐる」は、後の公民権運動のバイブルともなったソローの代表作を環境的な視点から論じる。同書の文学性を指摘した先行研究を精査するとともに、女性作家らを中心とする思想の継承や国立公園の排斥の歴史、土地の核化といった史実を横断的に論じる。「市民の不服従」と「マサチューセッツ州の奴隷制度」に関して、「社会的文脈とは関係が希薄とも見える自然史家としてのソローの、エコロジーの原理からくる社会のヴィジョンが提起されている」(326)作品であるとし、ソローの政治性と自然観との強い結びつきを述べる。鳥克也氏のコラム「ハリウッド映画とSF小説に登場する普通のボーイスカウト」では、映画や小説の中で描かれるスカウト活動を紹介する。アメリカでのスカウト活動の隆盛とともに二つの映画におけるスカウトの描写を対比させる。第二次世界大戦後の子育てをする親たちにとって、スカウト活動は理想的な活動であり、そうした親たちの子供たちに対する願いという角度から分析を行う。大地真介氏のコラム「アメリカ文学と世界の映画」では、アメリカのみならず世界の映画界に影響を与えたフォークナーの存在を示す。フォークナーの作品は「貴族階級の白人男性層という旧南部社会の基盤の解体」というテーマとともに数々の映画作家に影響を与えてきた。大地氏は、「〈ストーリー〉の基盤の解体」(353)を軸とした作家たち個々の技法や試みにより、新たな命を吹き込まれた作品について解説する。

書 評

本書はそのタイトルが示すとおり、アメリカに纏わる諸研究から過去の歴史を振り返るとともに、現在に生きる我々は何を学び、どのように活かすことができるのかを物語る。全体を通して読んでみると、50年という長きストリームの中で千差万別で多角的視点の風味を帯びた糸が撚り合わさり、まるで「現在地」に集約されていくような感覚を覚える大著であった。

西谷拓哉・高尾直知・城戸光世 編著

『ロマンスの倫理と語り——いまホーソーンを読む理由』

(開文社、2023年5月、461頁)

藤 沢 徹 也

本書は、日本ナサニエル・ホーソーン協会設立40周年を記念した論集である。この企画は2021年5月の大会総会で発表され、9月11日にメールで『今なおホーソーンを読む理由——倫理か、謎か、文体か』という仮の題での原稿募集が会員に通知された。この本の趣旨は、「なぜホーソーンはこれだけ読まれ続けるのか、今なお我々がホーソーンを読み続けている理由は何なのか。その考察を通して、ホーソーン文学の現代性を改めて考えてみたいという」ものだ (iii)。

原稿募集の段階では、ホーソーンを読む理由を、〈倫理〉：「心の真実」、歴史的・社会的状況との対峙、宗教、環境倫理等を含む、人としての生き方、モラルに関わる考察、〈謎〉：作品中、あるいは作家の人生における謎、不可解さへの推理的興味、人間的関心からの考察、〈文体〉：読者を引きつけてやまない文章の力、小説の形式、ジャンルの精密な読み解きの3つの観点からの考察としていたが、編集をすすめる内に、〈倫理〉と〈語り〉の2つに整理することになり、タイトルと構成に反映させることになったという。構成は3部で、第1部は「ロマンスの倫理」と題し10編の論文、第3部は「ロマンスの語り」と題し9編の論文が収録されている。第2部は「倫理と語りの中間領域——「埋葬」をめぐるロマンス」と題し3編の論文が収録されている。これは、〈倫理〉と〈語り〉の両者にまたがった論考も多くある中、特に「埋葬」をテーマとした論考が3編あることに着目し、〈倫理〉と〈語り〉の両セクションをつなぐブリッジとしたということである (x)。

前置きが長くなったが、22名全員の論考を紹介するのは紙面上不可能なので、中四国支部の会員の論考を紹介し、中四国でホーソーンを読む理由を考えてみたい。

城戸光世氏の「〈エシカル・ルネサンス〉期のホーソーン文学」は倫理的転回の中でホーソーン文学を捕らえ直す論考である。かつては広く共有されていた文学の道徳的側面が、20世紀末から現在にかけて新たに注目され、倫理的実践としての文学批評が脚光を浴び始めているとし、その「倫理的転回」が起こった背景について、現代思想の潮流の変化などローレンス・ビュエルによる6つの要因分析が紹介される。

まず、短編集における「モラル」について論じられる。「モラル」という語に含意される「道徳」は、「社会における善悪や正義の判断を読者自身に問うような、複雑で、多義的な、人の内面性に関わるもの」となっており、必然的に自分と異なる〈他者〉理解の試みへと繋がる倫理的なものとなっていると捉えることもできるだろう」と指摘する (8)。また、「モラル」という語は、当初の物語の「教訓」という限定的な意味から、本質的に善悪や正邪の判断に関わるような、人の内面を表すことがほとんどとなっていると指摘し、それは短編やスケッチから長編小説への創

作ジャンルの変遷と無関係ではないようだと言っている。

次に、「倫理」への考察へと移る。「モラル」は個々の人物の内面性や特性を表すものである一方、「倫理」は、人の道徳性に深く関係はしているものの、個性よりも普遍的で抽象度の高い学問的体系を指している」と説く(13)。そして『緋文字』においては、「登場人物たちがそれぞれの「道徳的〔精神的〕荒野」からいかに抜け出し、他者との関係の中で己の倫理を確立しようといかに葛藤したのかが描かれた作品だとも言える」と述べる(16)。

作品を倫理批評で読む際には、登場人物が他者との関係性を築こうとする過程に大きな焦点が当てられ、利己主義や自分本位により他者との関係が壊れてゆき、利他主義では人間関係構築の可能性が生まれることが描かれていると指摘する。ホーソーンは他者や共同体との関係性にこだわった作家だから、他者への理解と寛容がますます必要なグローバル社会において読者を引きつけているのかもしれないと現代性が述べられる。

最後に、親密圏という概念から考察される。作品は、「愛の共同体」である近代的な親密圏の崩壊の様が描かれていると捉えることができるし、現代の親密圏の新しい捉え方では、語り手と読者、あるいは読者と登場人物との間に共感を介した親密な関係を作り出そうとした試みと見なすことができると説く。このように、他者との脱＝近代的な緊密圏の可能性に開かれたホーソーン文学は、多様な他者との共存や関係性構築を目指す現代社会において、ますます重要性を帯びたテキストとなっていると締めくくられる。

川下剛氏は、「視線と仕草——『ブライズデール・ロマンス』における劇場の隠喩」において、パフォーマンスという概念を元に作品を分析する。川下氏は同様に『緋文字』と『七破風の屋敷』の論考をすでに発表し、昨年12月の当学会の冬期大会では、『大理石の牧神』について発表され、4長編の論考が完成したことになる。パフォーマンスとは、「演劇や儀式といった特殊な場面から日常生活にいたるまで、本来の自分を他者から隠し、その場に応じた仮面を着け、観客に行為を提示すること」とまとめられ(325)、役を演じる登場人物について考察する。

最初の夕食の場面で、ゼノビアは自分はホステス役でカヴァデールたちは「お客」、翌日からは「兄弟姉妹」だと役を振り当て、次に登場するプリシラも素性を隠し共同体の兄弟姉妹の役を演じ、ホリングズワースは利己的な野望を隠して同胞の役割を演じていると述べる。1人称の語り手であるカヴァデールは、自らを「古典劇のコロス」に似た観客役と定め、主要人物の気持ちに寄り添い、それを代弁する役を引き受けるが、当然すべてを理解できないので、目に映ることを語ることになる。それは語り手も知らない登場人物の心の真実を表しているのだから、読者自身がそれを解釈しなければいけないと説く。また、語り手が目にした「謎」は「謎」として読者に提示し、読者がその「謎」を解き明かすように誘導し、読者自身が登場人物の行動、つまりパフォーマンスを読み解けるように仕掛けていると指摘する。また、カヴァデールはよく「信頼できない語り手」だと評されるが、アシュレー・ラトナーを引用してこう説明する。読者が作家の私生活まで関心を寄せており、彼らが作家と登場人物を結び付けることがないよう「不可解なペルソナ」を描いた。つまり、パフォーマンスを利用して、当時の読者を欺く戦略であったと説く。

現代性として、インターネットなどの身体を必要としない仮想空間がひとつの舞台となっている今、この作品は人が本来の自分とは異なる他者をいかに演じているかに気づかせてくれ、パフォーマンスという概念は、身体的重要性を認識させると締めくくられる。

辻祥子氏は、「ホーソーンの失われた「上昇する螺旋」——二十一世紀に読む巡礼の旅の物語」において、晩年ホーソーンが創作に行き詰まった原因を登場人物の旅から考察する。

長編について、『大理石の牧神』以外は、「登場人物の心の旅路が巡礼に喩えられ、なおかつ上昇する螺旋の軌跡を辿って」おり (369)、例えば、『ブライズデール・ロマンス』のホリングワースは自らの罪深さを受け入れ、欺瞞に満ちた理想追求の旅を振り返し、精神的向上を果たしていると述べる。一方、『大理石の牧神』では、ミリアムとドナテロの旅は最後のところで曖昧にされるという。罪による教育に言及するミリアムを、「作者自身が、奔放なミリアムをどのようにコントロールしてよいか、最後まで迷っており、結果的に彼女の描写には不自然な揺らぎが見られ」、ドナテロに関しても、「彼の心が本当に救済されたのか等最大の問題は宙吊りにされて」いて、「二人の心の軌跡は上昇する螺旋とは程遠い状態になっている」と指摘する (378)。イタリアという異国の地は過去が蓄積された有害な影響力があり、独立戦争の最中でもあったので、ホーソーンは戻ってくる場所を見いだせなかったと説く。

最後にその後書こうとした『セプティミアス・フェルトン』が未完に終わった理由を探る。タイトルと同名の主人公は不老不死の霊薬を開発し、死から逃れようとする。彼のその開発の探求は旅のイメージで語られ、その同伴者になるように頼んだシビルは、彼の完成させた薬を自ら飲み命を落とす。このことにより、彼は旅から戻る道を失ったと述べられる。また、セプティミアスと正反対の、精神の不滅に価値を置く利他的な軍人口バートが、生と死に意味を与えてくれる聖なる仕事である兵士になることを薦めるが、混乱と恐怖の戦場は孤独な探求の旅から引き戻す場所とはならないと説く。さらに、エドワード・H・デイビッドソンの南北戦争により、ニューイングランドの堅実な世界は、その道徳的テーマと共に消え去ったという言葉を採用し、「混沌とした世界から主人公を引き戻すだけの力と確固とした基盤を彼 [ホーソーン] 自身見いだすことができなかつたといえる」と述べる (382)。

現代性として次のように述べられる。今日の複雑化した社会で、上昇する螺旋の戻り道が見えにくくなっている中、疫病の蔓延などの異常事態に次々遭遇し、真理探求の旅から戻って身を委ねられるような確固とした世界や道徳規範そのものを私たちは見失っている。『大理石の牧神』や未完のロマンスはまさにその世界にあり、そこに住まう登場人物に、私たちの姿を重ね合わせることができる。「ホーソーンの世界を初期から晩年まで読み直し、創作の行き詰まりの原因を探る意味は、そこにある」(383)。

本書から伝記との関係や他の作家との比較等、多くのこと学び、生きるヒントも得ることができた。副題の「いまホーソーンを読む理由」の主語は「まえがき」によると「我々」とあるが、具体的に誰なのだろうか。ひとりでも多くの読者という希望は当然あるだろうが、米文学者、最終的にはアメリカン・ルネサンスを専門とする学者、特にホーソーンの専門家となるのではないだろうか。執筆者の所属を見ると、関東、関西圏で合計16名なのに対し、中四国は2名で、これはホーソーンを読んでいる教員と学生の数ともおそらく関連するであろう。当地域では大都会に比べて、ホーソーンはもとより米文学の研究、教育環境は恵まれてはいないかもしれない。それでも中四国でホーソーンを読む理由を求めるとすれば、次の一言につきるのでないだろうか。

I-I myself-am in love-with-Hawthorne!

諏訪部浩一 責任編集

『アメリカ文学入門 [新版]』

(三修社、2023年10月、462頁)

大野 瀬津子

『アメリカ文学入門』の初版出版から10年、同書の新版が出版された。このなかに再掲載された「初版への序文」によると、初版は「何から読めばいいかわからない」人向けの「入門書」として書かれたという(4)。巻末資料にレポート・卒論の書き方が含まれていることから、主たるターゲットは、卒論の執筆を控えたアメリカ文学専攻の学部生、すなわち潜在的な研究者であると考えられる。そうした読者に「実際に書物を紐解いて」もらうこと、そして「読んでいろいろ考える」という「能動的読書」を通して、「アメリカ文学を読んだという実感」を持ってもらうことが本書の目的である(4、5)。巻頭では、初版のスタンスを継承し、新版も「入門書」とあると宣言される(2)。第1部の「アメリカ文学の歴史」では、6つに区切られた時代ごとに、歴史、文学史、作家紹介の順に概説が展開していく。作家紹介では、各作家の生い立ちから思想的背景、代表的作品や注目すべきポイントなどが手際良くまとめられ、初心者にお薦めの参考文献も紹介される。第2部の「アメリカ文学の重要テーマ」では、各テーマがアメリカ文学のなかでどのような重要性を持っているのか、そのテーマに注目すると各作品をどのように読むことができるのか実践的に示される。巻末にはレポート・卒論の書き方だけでなく、アメリカ文学史年表、アメリカ歴代大統領、アメリカ合衆国基礎データ、「さらに学びたい人」向けの参考文献も付されている。ざっと見渡すだけでも、初学者が「能動的読書」へと進むための仕掛けが周到に準備されていることが窺えるだろう。実際、本書の各項目から、作家や作品の面白さを伝え、研究の第一歩を踏み出してもらおうという執筆陣の熱い思いが伝わってくる。研究のとば口に立つ読者に宛てて、このような充実したガイドブックの新版が上梓されたことを、素直に慶びたい。

大学生向けの文学ガイドを編纂するにあたり最も悩ましいのは、どの作家を組み込むかという問題であろう。この『アメリカ文学入門』では、初版で100名が選定され、新版ではさらに20名が追加されている。この入門書全体の「中心」となるこれらの作家たちは、どのような基準で選ばれたのか(11)。初版の「第1部 アメリカ文学の歴史」冒頭のまえがきでは、100名を選ぶにあたり、「『現在』の時点において重要であると思われる作家達を入れるように努めた」とある(9)。新版の「新版に際して」では、今回の選定基準も「初版のときと同じ」で、「『現在』の時点で重要であると——研究・教育の場における過去10年の動向を意識しながら——判断した作家」だとされる(2)。ならば今回追加された20名は、まさに2023年現在、同書の編集執筆者たちが紹介すべきと定めた作家、ということになる。これら新顔たちを解説した文章を観察すれば、編集執筆者たちの目に映ったアメリカ文学研究の新しい流れを見通すことができるはずである。以下では、新規に追加された作家についての記述の傾向を洗い出し、入門者に向けて、新版

がどのような展望を示しているのか明らかにする。

新版に追加収録された作家 20 名のうち、第 2 次世界大戦後から冷戦終結までを扱う 5 章に 6 名、冷戦終結後以降をカバーする 6 章に 10 名が集中している。最終章に多くの作家を追加したことによって、「21 世紀のアメリカ文学に関しても、一定程度の紹介をすることができた」と「新版に際して」で述べられる (2)。後から出てきた作家ほど評価に時間がかかることを思えば、初版刊行以降に研究者の耳目を集めてきた最近の作家を中心に補完するのは自然な営為であろう。それは、上のコメントが示唆する通り、新版が現代の作家たちに目配りしていることの表れともいえる。この点を押さえた上で、今回足された作家たちについての解説文に目を移し、執筆陣がどのような観点からこれらの作家を価値づけているのか、その共通項を探っていこう。

まずは第 2 次世界大戦までの 4 章分で新たに名を連ねた作家の解説文を吟味する。先陣を切るのはマーガレット・フラーである。解説では、20 世紀の女性思想家に先んじてフェミニズムの考えを表明した「先駆性」が取り上げられる (51)。新規性に続いて、古典教養にも精通した彼女の著作が、「ギリシャ・ローマの神話や古典から同時代の詩や散文に至るまで」の「膨大な引用のパッチワーク」で成り立っていることも言及される (51)。未来の思想を先取りしつつ古典にも依拠するフラーに注目するこの記述は、19 世紀当時の思想や文学潮流に収まらないところに作家の魅力を嗅ぎ付ける。フレデリック・ダグラスの解説は 3 冊の自伝を焦点化し、3 冊目の『生涯と時代』に「人権の尊重される世界を目指す国際的な視座」への「到達」を読み取る (57)。それとは明示してはいないものの、この解説は、20 世紀後半の公民権運動の理念を先取りする先進性をダグラスに認めていると考えられる。チャールズ・チェスナットの紹介は、「黒人の血を持ちながら黒人について真剣なフィクションを書いた最初のアメリカ人」を自認していた彼が自身の作品を「1 世代早すぎた」と述懐した挿話を披露するとともに、黒人奴隷の目から「脱神話化された南部や「人種」のゆらぎ、黒人共同体内の悪などに向き合った」この作家の姿勢に、後続するハーレム・ルネサンスの作家やフォークナー、モリソン作品の到来を「予感」する (89)。ジョン・ファンテの説明は、代表作 3 作が「その地位を確固たるもの」にした要因として、「ロサンゼルスという特異な空間のリアリティ」が、「時代の特徴には還元されない率直でむき出しの声によって語られる」点を挙げる (153)。かくして最初の 4 章に加増された作家紹介では、作家が活躍した時代の枠組みからの逸脱が浮き彫りにされている。

5 章と 6 章に新掲載される作家たちの多くは、アメリカというカテゴリーそのものを攪乱する方向性を秘めているように思われる。その急先鋒はカレン・テイ・ヤマシタである。解説は、彼女が「日系性というエスニシティの諸相を描くことで、国家的枠組みに縛られていた「アメリカ文学」に対する抵抗を示した」、と明言する (280)。ヤマシタは、日系アメリカ人でありながら収容所経験という集合的記憶から長らく距離を置き、またアメリカ合衆国における日系人だけでなく、日本を訪問する日系 3 世、さらにはブラジルの日本人移民や日系人の姿を活写してきたという。このような「国家という概念を根底から突き崩していく所作」によって、ヤマシタは今後のアメリカ文学が進むべき「指標」を示した、というわけだ (281)。ヤマシタのように抵抗まではせずとも、アメリカという国家的範疇からはみ出す新顔はあちこちにいる。ゲーリー・スナイダーは「政治的に引かれた国境ではなく生態系で地域を捉え、生物として自らの生態地域への帰属意識を持つこと」を提案し (213)、トニー・クシュナーはアフガニスタンやロンドンを舞台に

多文化共生の難しさを問い (285)、ラン・カオは「現在に常に影を落とし回帰し続けるフォークナー的過去のあり方をベトナム的だ」と形容したという (295)。さらに、「南部の内なる他者」とされるアパラチア地方出身であるがゆえに「南部の特殊性」に拘らず「空疎で匿名的な場所」を独特の手法で描くボビー・アン・メイソンや (240)、神話や古典を使って「現代詩人の私的な記憶を神話化・普遍化するとともに神話の人物の声を現代的・個人的なものに再生する」ことを試みているルイズ・グリユック (269) は、アメリカから遠ざかり普遍性に向かう。5章以降に追加された項目では、国家の縛りに収まりきらない作家の振る舞いが目立つ。

5章以降には、ジャンル横断的な作家も登場する。大衆小説の「『ホラーもの』の書き手」として長年輕視されてきたシャーリー・ジャクソンは、アメリカン・ゴシックや家庭小説の系譜に位置付け直される (182)。「通俗性」や「メロドラマ性」によって文学史から振るい落とされがちであったラッセル・バンクスも、過去の自然主義小説が同じようにメロドラマ性を持っていたことを根拠に、再評価が予言される (239)。他方、ラルフ・エリソンは、「アメリカ文学を形作ってきた語り」に「ジャズやブルースといった黒人音楽の要素も取りこむ」点がひとつの魅力とされる (173)。ジャンル混交的な作家のなかには、既存のアプローチで捉えきれないとされる者もいる。「文学ジャンルを軽々と乗りこえながら、個人の苦しみや愛情を静謐に描く」ハイチ生まれのエドウィージ・ダンティカは、「従来（『抑圧者対被抑圧者』のようなともすればやや図式的な）枠組みや『植民地経験』・『ディアスポラ』といった単語では説明しきれない」(300-01)。同じくジャンルが「毎回大きく変化するように見える」小説を発表してきたコルソン・ホワイトヘッドの作品も、「従来 of 批評的枠組みでは捉えきれない新しさ」をもつ (302)。さらには、文字だけでなく音でも表現する人たちが加わっている。その最たる例は、ノーベル文学賞受賞の記憶も新しい歌手、ボブ・ディランの登場だろう。「紙面を通した現代詩人の多様な表現」こそ乏しいが、彼は「詩のトーンや情感」を「曲調や歌唱法」で表現する、とされる (245)。劇作家のスーザン＝ロリ・パークスは、「詩の朗読・詠唱や音楽の要素を演劇に持ちこみ、言語表現の可能性を探っている」という (297)。5章以降に追加された作家たちは、ジャンルを横断し、文字と音声の間をたゆたいながら、旧来の文学概念の範疇を踏み越えていくのである。

こうして見てくると、この新版で補強された作家紹介は、「アメリカ」、「文学」、「文学史」、「アメリカ文学」、「ディアスポラ」といった概念によるステレオタイプ化に抗い、それらの概念の有効性すら揺るがせていくような作家に光を当てていることが分かる。今後はこうした傾向をもつ作家がトレンドになるという展望を、本書は示しているといえる。その展望は、これから出発する学部生のコンパスになるだけでなく、既に道の途中にいる研究者にも自戒を促してくれる。私たちは個々の作家や作品を、アメリカという国や、同時代の文学潮流や、お決まりの批評用語のフレームの中に無理やり押し込めようとしていないだろうか。これまで反復再生産されてきた文学研究の鑄型に還元されえない、テキスト独自の面白さを引き出すこと。それこそ研究者の使命であることを想起させてくれる一冊である。

編集後記

『中・四国アメリカ文学研究』（第60号）をお届けします。今号には1本の応募論文が寄せられました。それを厳正かつ慎重に審査しました。編集委員会の中で検討を重ねましたが、残念ながら掲載には至りませんでした。

前号と比べて投稿論文の数が大幅に減ったことについては誠に残念です。次号にはより多くの論文が投稿されることを心から願っています。なお、大会「特別講演」の項目は、講師の先生のご都合により今回はありません。会員の皆さまの研究を公表する場として、本学会誌を積極的にご活用ください。

今号の執筆者の氏名と所属機関は以下の通りです。

大野 瀬津子（九州工業大学）
重迫 和美（比治山大学）
辻 祥子（松山大学）
堤 千佳子（山陽小野田市立山口東京理科大学）
中井 誠一（関西外国語大学）
中村 善雄（京都女子大学）
藤沢 徹也（広島商船高等専門学校）
増崎 恒（追手門学院大学）
町田 みどり（一橋大学）
真野 剛（海上保安大学校）

今年度の編集委員は以下の4名です。

戸田 慧（広島女学院大学）
外山 健二（山口大学）
藤吉 知美（島根県立大学短期大学部）
増崎 恒（追手門学院大学）

次号は2025年6月に発行の予定です。中・四国アメリカ文学会のホームページで投稿方法、ならびに投稿規定を必ずご確認の上、投稿くださいますようお願いいたします。会員の皆さまからの多数のご投稿をお待ちしています。また、過去1年間に会員が関わって出版された研究書等の中で優れたものの「書評」を掲載しますので、ご献本をお願いします。

44号以降の会誌の内容はすべてPDF化し、学会ホームページで公開しています。43号までの会誌については、目次のみ公開しています。ご活用ください。

なお、中・四国アメリカ文学会は、本機関誌『中・四国アメリカ文学研究』（*Chu-Shikoku Studies in American Literature*）に掲載された論文の著作権を保持し、印刷媒体・電子媒体でこれを公開する権利を有しています。会員が所属される機関等で、会誌に掲載された論文を公開される場合（個人のホームページ等を含む）、「中・四国アメリカ文学会著作権ポリシー」に従ってください。同ポリシーの詳細は学会ホームページでご確認ください。

今号から編集委員長が交代しました。また、外山先生に編集委員に新たに加わっていただきました。査読に尽力いただいた編集委員はもとより、随所で助言を賜った学会の執行部の皆さま、そして今号にシンポジウム報告、研究ノート、書評をお寄せいただいた会員の皆さまには改めて御礼申し上げます。加えて、詳細な引継ぎ資料を準備くださった前編集委員長の重迫先生には深く感謝いたします。この交代が後退ではなくて本学会誌の益々の前進に貢献できるよう励む所存です。会員の皆さまのご理解とご協力を引き続きよろしくお願いいたします。

2023年6月に発行された『中・四国アメリカ文学研究』（第59号）に誤りがありました。謹んでお詫び申し上げますとともに、下記のようにご訂正をお願い申し上げます。

16頁13行目：誤「難波辰郎」→正「南波辰郎」

支部編集委員長 増崎 恒

投稿規定

1. 資格：本学会会員であること。
2. 内容：アメリカ文学全般に関する、未公開の研究論文。基本的には単著とする。共著の場合は申し込み時に相談すること。
3. 制限：投稿原稿は、完成原稿とし、一人につき1篇とする。
4. 体裁：1) 執筆に際してはワープロ・ソフトを使用し、和文・英文とも、仕上がりページの書式（A4版で、1ページ43字×38行、文字のポイントは11）に設定すること。
2) 和文の場合は、注を含む9枚以内の本文（引用文献は本規定の枚数制限外とする）に、300語程度の英文アブストラクトと5つ以内のキーワードを付すこと。英文アブストラクトはネイティブチェックを受けること。
3) 英文の場合は、注を含む11枚以内の本文（引用文献は本規定の枚数制限外とする）に、300語程度の英文アブストラクトと5つ以内のキーワードを付すこと。本文および英文アブストラクトはネイティブチェックを受けること。
4) 和文の場合は、外国語の固有名詞（人名・地名）および作品名は日本語で示し、初出の箇所での原綴りを丸括弧内に表記すること。ただし、よく知られている場合は省略してよい。
5) 本文中の引用の仕方、注および引用文献の表記の仕方、英文原稿（英文アブストラクトを含む）のスタイル等に関しては、*MLA Handbook for Writers of Research Papers* の最新版に従うこと（Works Cited方式とする）。
6) 投稿論文には、氏名、謝辞、口頭発表の仔細などは記載せず、表題のみを記すこと。
7) 投稿論文には、通し番号を付すこと。
5. 提出：1) 打ち出し原稿2部を提出すると共に、MSワードで作成した添付ファイルをメールで送ること。
2) 中・四国アメリカ文学会のホームページにある「投稿チェックシート」をダウンロードし、必要事項を書き込み、打ち出し原稿と共に送付すること。
6. 締切：1) 投稿希望の場合は、毎年10月末日までに、(1)論文の表題、(2)和文・英文の別、(3)予定枚数、(4)氏名、(5)所属、(6)住所・電話番号・メールアドレスを、葉書あるいはメールで連絡すること。
2) 投稿の締切は、毎年1月10日とする。**期限厳守**。
7. 宛先：投稿希望および投稿論文原稿等の宛先については、学会ホームページで確認すること。
8. その他：投稿原稿は返却しない。

*本投稿規定は2024年6月30日現在のものです。最新の投稿規定は、ホームページをご覧ください。

*「シンポジウム報告」および「書評」の執筆要領は、ホームページをご覧ください。

ISSN 0388 - 0176

中・四国アメリカ文学研究 第60号

2024年6月30日 発行

編集兼発行者 中・四国アメリカ文学会
発行責任者 大地真介
編集責任者 『中・四国アメリカ文学研究』編集委員会
事務局 広島修道大学
塩田弘研究室

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東 1-1-1

Tel: 082-830-1194

E-mail: shiotah@shudo-u.ac.jp

URL: <http://www.chushikoku-als.org/>

印刷 協和印刷株式会社

〒615-0052 京都市右京区西院清水町 13

Tel: 075-312-4010 Fax: 075-312-4011

Chu-Shikoku Studies in American Literature, No. 60

Edited, published, and distributed by

The Chu-Shikoku American Literature Society

Executive Office: Prof. SHIOTA Hiroshi

Hiroshima Shudo University

1-1-1, Ozuka-higashi, Asaminami-ku, Hiroshima 731-3195

Japan

Tel: +81-82-830-1194

E-mail: shiotah@shudo-u.ac.jp

URL: <http://www.chushikoku-als.org/>

